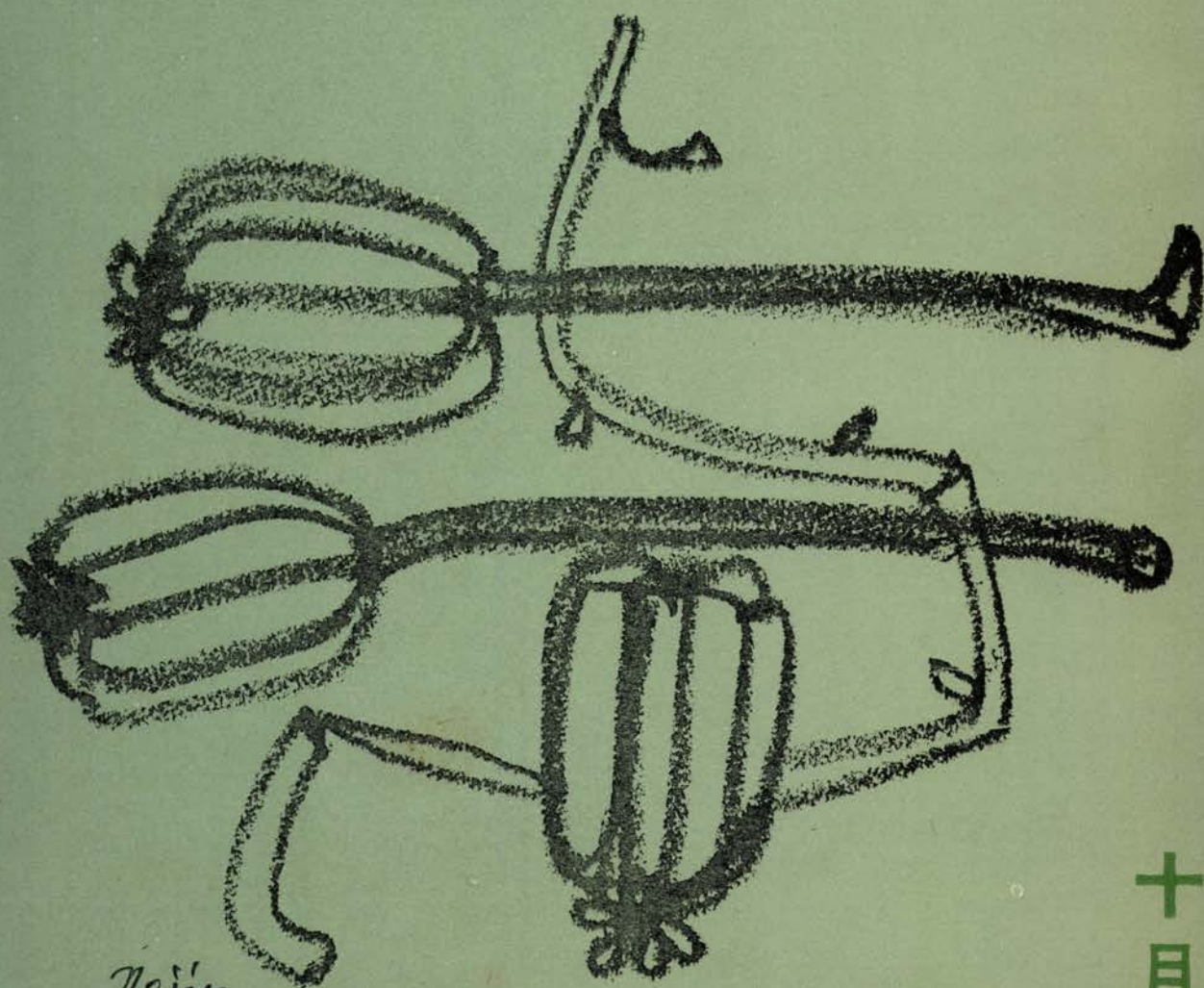


川柳の雑記

麻生路郎 主宰



十月号

No. 413

No. 413

Pensoj flugas trans la land-limon

THE SENRYU ZASSHI

川柳雑誌社主催

11月本社句会

本社十月句会

夜長を楽しむ秋です。

さあ句を手にしましょう。

日時 十月七日(土) 午後六時

会場 関西会館 (740番)

大阪市天王寺区上ノ宮町四八

(天王寺電話局東隣り)

道順 市電上本町八丁目下車(北へすぐ東側)

兼題 「前」 「身」 「三」 麻生路郎選

(路郎選に限り七時出句/切厳守)

「片」 「所」 「三」 清水西柳選

「題」 「才」 「三」 正木水客選

「相」 「馬」 「三」 八十摩天郎選

席題 三題(当日発表)

北川春里

呈賞 各題天位・立路郎選天位に不朽賞賞カブ

会費 百円

幹事 葵香・松舟・いさむ・藤花・文科・清佑・狂二

・与呂志・白木・木村・すむ・藍田子・水野

・柳去子・舟遊・一三夫

★投句だけの方は郵券三十円

同封(切十月五日)

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

川柳雑誌社句会部

電・住吉 06-0811

大阪市民文化祭第13回川柳大会

恒例による大阪市民文化祭の川柳大会は左の通り第十三回を迎えるに至りました。初心者の方々も多数投句されまう、おすめくたさい。又どなたも出句の有無にかかわらず、来場の程お待ちいたします。

主催 大阪市・大阪府教委

後援 毎日新聞社

日時 昭和36年10月15日(日)

十一時開場・一時開会

会場 毎日新聞大阪本社講堂(市電桜橋)

司会 西尾 栄

開会の辞 川村好郎

講演 堀口 塊人

(大阪式表現と川柳)

当日二題発表

兼題 「め」 「し」 麻生路郎選

「算」 「盤」 武田北人選

「御堂筋」 市場没食子選

「煙」 市部幸男選

「鼻」 三条東洋樹選

(古典奇術) 加藤 繁雄

余興 戸糸己之介

川柳賞 萬・兼題優秀句に大阪市長・教育委員長から川柳賞を贈呈。

各題毎にはがき型句箋及び官製ハガキ一枚

に二句ずつ明記、大阪府北区中之島市教

委内 文化祭川柳大会係宛(九月三十日着

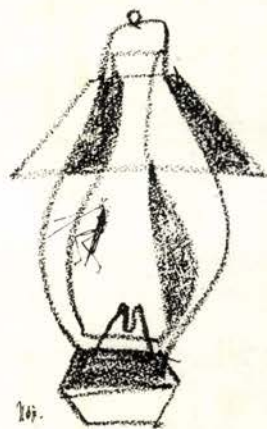
限り/切)

希望者に頒布。(五〇円、郵券可)

入選句集

不朽洞句帖

麻 生 路 郎



第二室戸台屋

人間の智慧が防潮堤ぐらい

台風一過 室までキョロリカンとして

台風一過 今日法事で忙がしく

塀に沿うて歩るく姿も尼僧なり

うつとりと観音さまを裸にす

企画弊損したことはもう忘れ

天気晴朗留守居のころ楽しまん

川柳雜誌十月号目次

[illegible]



川柳 名句と難句

麻生路郎

〔二一七〕
公休を訊けば先約おますネン

(多久志)

一寸いかす顔の仲居さんに、公休日を訊いたら、みなまで云わぬうちに、「せっかくやけど、先約がおますネン」と、あっさりハズつられたと云うのである。

この句から当って碎ける式のお客さんの多いことも想像されて、面白い句だ。大阪弁のおますネンのおますは「あります」、ネンは「……のだ」という助動詞。

〔二一八〕

少年の頃の涙は珠となり

(夢 虹)

少年の頃に、ホロボロと涙を膝の上や畳の上に落して泣いた記憶を誰もが持っていると思う。この句には少年の純真さがよく出ていて、詩情の豊かさを思われる。

〔二一九〕

社の人事こんな無口な夫にし

(実 男)

「あんた、一本つけたわよ」と云っても、夫はいつもの「そうか」を云わなかった。

「吾んてから、好きな葬でもうって来てはどう？」

と云っても、何等の返辞もなかったのである。

〔二二〇〕

ひき逃げはアロハのシャツにサンゲラス

(甲 吉)

ひき逃げがあった。捕えて見たら、アロハのシャツを着、サンゲラスをかけたあんな、ちやんだった。斯うした男は殆んどが無免許で、酔っぱらい運転が多い。

アロハはハワイ語で「挨拶」とか「さようなら」という意味の言葉だそうだ。派手な模様をプリントした羽二重地で仕立てた開衿シャツだ。戦後のわが国では夏の都会で流行し「アロハ人種」という言葉も出来たが、近ごろではクラスが落ちて、サンゲラスを掛けたあんなちゃん階級のものとなっている。

サン・ゲラスは夏の強烈な光線除けの眼鏡で、以前は海岸で使われ、街なかでかけるのは映画俳優くらいだったが、近頃は男

も女も夏になると掛けるようになった。スモーク・グリーン(緑灰色)が一番ハイカラだそうである。

〔二二四〕

謝りもせずに善処する善処する

(八九寸)

お役人心理を巧みにキヤツチした句だ。失策を追究されても、なかなか謝やまろうとはしない。謝まることは役人の權威に關することだと思っている。

彼等の最後のキリ札は官尊民卑が生んだ「善所する」という言葉だ。

〔二二五〕

ホワイトが好きな女で近寄れず

(雄 声)

ホワイト(白色)のスーツで、颯爽と歩いている女にはインテリ女性が多い。そんな女性にはウツカリ言い寄れないと云うの

〔二二六〕

島の内みみずも体くねらせて

(阿 茶)

道頓堀を北に渡った島の内界隈は従来、芸者、鬻間、仲居、役者の住宅が多かった。今はそれほどでもないが歓楽地帯をひかえた特殊地域と云えるだろう。

その人達の道行く姿は常に、からだをくねらせているので、もともと、からだをくねらせているみみずではあるが、「みみずもからだくねらせて」と、皮肉な観方をしたのである。比喩法によって生かされた句こんなところにもユーモラスが転ろがっていることを発見した作者のけい眼を称えたい。

社の人事で、ガツカリした夫を慰めるすべもない妻の心情に巧みにとらえていく。

〔二二〇〕

眼を愛すいらぬ時には閉じておく

(雄 声)

老境の淋びしさが、かもしだした句であろう。

「もう四号活字が、ボヤツとしか読めないのネ」

と、いかにも淋びしそうだ。

「電車の中では、眠いわけではないが、いつも、眼を閉じているんだよ」

と、いかにも余生を愛しているらしいことをいう。斯うした句境をとらえた作者も又六十路を過ぎているのであろう。

〔二二一〕

おじいちゃんと言われアルサロで腐り

(没食子)

「バイきげんでアルサロへ行く。まだまだ若いつもりが、

「おじいちゃん、おどれる？」

と、訊かれて、ギャフンとまいり、にわかシユンとしたのである。船はとりたくないと繰返し思ったことであらう。

アルサロはアルバイト・サルーンで和製英語である。戦後、未亡人を売物にした、女事務などで流行したものだ。

〔二二二〕

早よどかな蹴とばしそうな婦人靴

(花 村)

爪先きの尖った婦人靴が流行る。スロー

モーションの男性にとってはおツかなびつくりである。早く身をかかわないと蹴とばされそうであるとは、いささか誇張に過ぎるかも知れぬが、たしかにそうした感じのする靴である。そこをつかんだ軽い穿ちの句。「早よどかな」は「早くのかねば」の大阪弁。

〔二二三〕

数学は零点だった奴が蓄め

(柳 葉)

数学に堪能なのと、がめつさとは別らしい。しこたま蓄めた彼は学校時代に数学はサッパリだったというのである。だから世の中は面白いのだとも云える。

〔二二四〕

病院の掃除は掃らすだけですみ

(法泉子)

広い病院だ。たんねんに掃除をしていては際限がない。それに人不足でもあるので、本で濡らすだけで胡麻化しておく掃除婦の要領のよさを「濡らすだけで済み」と皮肉ったのである。

庶務の監理職員も何ぶん予算がないのを見て見ぬ振りをしておくのである。斯うしたことは病院に限ったわけではなく社会には斯うしたことが随分と多いので、この句に興味が持てるのである。

〔二二五〕

腹上死と聞いて親せきまで笑い

(七面山)

人の終焉は深酷だが、腹上死だと云うので親戚までが、

「おっさんらしい死に方やないか」と云って笑ったというのである。腹上死を詠んだ句は珍らしい。私の知っている範囲ではこの句の外に、

腹上死でなくて老らくホツとさせ

(麦太楼)

ぐらいなものである。

水上瀧太郎が小説で、山崎豊子が映画で取扱っていたが、男性の腹上死は脳溢血で、女性の腹上死は心臓マヒだそう。

〔二二六〕

まだ紐がついた眼鏡で母は縫い

(光 郎)

一読、老境の母が眼に浮かぶ句だ。老いたる母にはレジャーらしいレジャーはない。いつも奥の座敷で、老眼鏡をかけて静にお針をしている。その眼鏡もいたって粗末なもので、紐のついたものである。いい眼鏡の買えない境遇でもないのに質素なものである。母の生涯は質素で貫らぬかれている。そこをキヤツチしたのがこの句だ。

〔二二七〕

裏切られても裏切られても宣教師

(清 生)

人若し左の頬を打てば右の頬をも与えよ

とか、云う言葉があるが、宣教師の仕事は浪気以外、忍耐以外にないような気がする。裏切られるか、迫害されるか、一人前の宣教師となるのは容易でないことを教えている。

〔二二八〕

腹の立つほど投資信託案内書

(美 喜)

わたしたちは、昼となく夜となく、働らくばかりなのに、食うてチョンなのである。だのに投資をしろの、預ってやろのと案内書を送りつけられる。そんな金が何処にあるのかと思うと腹が立つというのである。社会の一部の人というよりも、大部分の人たちにはそんな金の持ち合せのないのが現状だ。

カヅト 富田 一 敬



お買物は…
清 明 美 しい



大阪梅田・水曜定休

阪 神

電大代表(36) 1201



川柳塔

奈良県 上田 翠光

伊達ノは歌麿描く線で締め

医者のお点ついて拝ます奴が来る

汗流すことのみ尊しとは愚なる農夫

何かが何処かで狂つてゐる俺は寝てゐる

八尾市 西尾 榮

隣席は女房でよい天城越え

河鹿きく妻もおんなじ宿浴衣

湯の街のシンボルという橋一つ

西宮市 若本 多久志

やるせない慕情老らくと言わば言え

六十の情熱はかす術もなく

小銭しかはいらぬように女持ち

ぼろ口を追うて自転車パンクする

勇退ということにして辞めさせ

大阪市 正本 水客

花植えて徒食さげすむ人であり

礼を云う言葉がふつと改まり

平凡をねがう私の胸の汗

高槻市 丸尾 潮花

湯の町を夫婦で流す三味を聞き

大阪市 西 いわを

美しい人であつたと死んだ母

夏の夜蜘蛛に等し想を練る

社長でも商売なれば名刺出す

大阪市 北川 春渠

口だけの男だケイベツしてやろう

人形へ名前をつけて女の子

着くやいなや一泊の旅土産買う

ホノルル市 羽佐間 柳葉

育児法姑と嫁のズレを見せ

酒の害説けば需要が逆に増え

反応がない筈自分だけの恋

堺市 吉田 圭井堂

墓詣り誰かが先に来たらしい

蓄めるだけ貯めて枳殻を垣に植え

二時間で廻る地球へこの遅配

飛脚でもきつちり文箱届いたに

遅配していても違反は見逃がさず

防府市 長野 井蛙

伏兵のように代議士ハガキくれ

刺青も被れて啖呵ほど効かす

見くびった無力が組織で立ち上り

同性の弱さを女医が口惜しがり

岡山県 直原 七面山

恋は好きだけれんど暇があらしまへん

北風にたじろぎもせず釜ヶ崎

女房に飽かれ出て行くとこもなし

蚊の刺したほどにも必えぬ死の抗議

観光も兼ねて陳情バス五台

貞操を捧げてデイト生き抜く気

豆萩進く潮の退いて行く加く

寄ってたかつて犯人かばう釜ヶ崎

鳥取市 河村 日満

昔遊くと風の便りのかなしくも

薄情を恨みしころ句で残し

スケッチもまくりあげさす暑さにて

大阪市 安岡 珊枝郎

ゴルフでゴルフでとあんな暮しして

倉敷市 木村 千容



さかだちの児へげんこつをかけるババ

二枚落で孫の手ほどきする銷夏

自家用のハンドル夢で握ってた

退いて吾をながめる目が欲しい

ここ三日門外不出なぶられる

加賀市 野村 味平

貰い子をしてと言われる齢になり

唐紙一重こうも気まずいものと知り

晩婚のからだを張って女事務

大阪市 木村 水洞

応援も体力が要る甲子園

病欠も混り外野で弥次り合い

汗かいて今日の務めに悔はなく

大掃除僕の休暇を待つて居り

女房を褒められてゐるてれくささ

妻と娘が同じ輪にいる盆踊り

高槻市 福田 丁路

商売をほったらかして名譽職

詰めかける見舞の顔に死期を知り

大阪市 真鍋 一瓢

男には懲りた話の薄化粧

増収の要あり女給考える

口だけじゃ取れない客と見た仲居

画いた絵はみな屋根うちの子むかいの子

大阪市 後藤 梅志

サロンパスの匂いへ貧がすれすれに

警官も素手では逃げる外はなし

将棋の駒の動き方も知らずに生きてきた

米子市 小西 雄々

アベックへ説教しない民主々義

立話してるところヘダンブカー

冷房があるに箱根で静養し

大阪市 山川 阿茶

池田さんの外遊

本店の意向をききにゆく羽田

奴隷みたいな浴衣で誘いに来

金いらんいらん云うてて利子はとり

大阪市 金井 文秋

伸びをする形であけるダンブカー

中年の瞳に若い娘の背が高い

綱帯を有難迷惑ほど聞かれ

社長の精勤大歯車に似て

加賀市 那谷 光郎

下積のまだ歯車のように生き

妓が扇子使う匂いをかいで飲み

かまぼこで飲むは瓶からじかに酌ぎ

鳥取市 大西 八歩

御先祖にふれる手紙の来るも盆

若さにはついて行けないジャズ喫茶

アルバイトの夢に描いた上高地

温泉地紅ちようちんが駅で揺れ

下関市 桜川 不水

糟糠の妻カサカサと秋に老け

タツタ一つその飯粒が見当らず

肝臓に叱られもせぬ僕の酒

岡山市 浜田 久米雄

旅だよりなにもなかったように出し

盃を代えて見るのも秋の酒

しんみりと飲む秋の窓を閉め

出雲市 尼 緑之助

レジャーでもないが義歯を掃除して

格式をききいお盆の墓掃除

おしのびの墓参を和尚に見つけられ

柳井市 弘津 柳慶

ボススツと署長はいるか入って来る

不快指数社長昼から帰宅する



鳥取市 杉谷 湖山

鉢巻の下をくぐって汗が落ち

京都市 大鶴 喜由

奥さんいたはりまっかと株屋が来

母の泪にかかず一対出来そびれ

かき捨ての旅アイヌ語で罵られ

奈良県 飯降 白香

コンプレックスがいわんでもよい事ついでに

旅三日野菜が食べとうなってきた

不如意勝ちそれでも家はいいところ

呉市 林野 甍光

女なり同じ職場でにらみ合い

トランベットはかない恋と知っている

岡山県 福島 鉄児

「お待ちになって」なんて平気で遅れて来

岡山市 服部 十九平

二度ともう出来ぬ顔して子をあやし

甘党がゲイシヤガールに馬鹿にされ

断りの手紙はババが書かされる

天顔に咫尺した日をおお誇り

野狐禪を嘲る如く蟬時雨

尼崎市 長谷川 三司

年寄りの頑固は夏の風邪をひき

母の忌へ妻は片身の単え帯

銀河浮ゆ別れし人の生死を知らず

岡山県 田村 藤波

宿題をする約束の西瓜切る

脱いどけば洗濯しとく妻のいて

児島市 本田 恵二朗

三十五度考える葦しおれそう

大上段に構えおうたり蟹の恋

階段が云いますあんたも年だっせ

お伺いいちいちたてて愛妻家

京都市 松川 杜的

車中からカメラ絶景亦逃し

吊橋の高さへ定まらぬ雲の位置

倉敷市 松村 万古

忠魂碑痛し痒しの観光地

うやむやな人生お墓だけ残り

按摩と按摩との間を映画見る

堺市 高崎 雄声

家がない周旋屋には売れ残り

ふくろうが昼出たようなアイシャドー

日本よ奥床しきはどこへいた

岡山県 永松 東岸

せちがらく星を眺めるひまもなし

花火のような浴衣の柄も涼しけれ

病床 吟

横のものたてにもせずに寝ています

倉敷市 野田 素身郎

同じ日焼けでも社長はゴルフの日焼けです

一人で居ても汗が出るのに寄り添うて

子が産れそれから残業いやがらず

大阪市 伊達 堰子

湯治だと思え草津の絵が掛かり

錆かけ屋の小供嫌いへ又たかり

釜ヶ崎騒動

蝙蝠の移ぎに邪魔な西成署

大阪市 不二田 一三夫

ペンやっと乗ればご飯の米客の

釜ヶ崎へでも行って石を投げたい日

兵庫県 酒井 ひか平

一と組は此処に居ますと水着干し



軍人恩給証拠の書類燃えて居り

神戸市 丸川 初甫

ビル白く人影一つない暑さ
絶景を落ちそうに行く観光バス

琵琶湖の夕景

鳥取県 田中 蛙眠子

面会も放り込みそうな鉄格子

池田市 前川 左文字

長命寺からは黄金色の湖

面会は寮の規則も聞いて去に

大ジョッキもてあましてる十七才

六波羅密寺

唐津市 新岡 回天子

花火にも貧富の差あり夕涼み

清盛も好々爺として運慶彫り

ほん踊りよう見りや六十のお婆さん

晩涼のテラス隣りの声があり

神戸市 仲 どんたく

岡山县 池田 古心

岡山县 池上 智恵美

米代を皆な使い込む子とはなり

ゴールデンウィーク日記は何も書いてなし

年がいても無く赤い灯よ青い灯よ

東京都 石居 高志

大阪市 橘 高薫風子

二番煎じやなど中元見破られ

宝くじ思案の末の二枚なる

子の潔癖母の枕を父にさせず

平田市 久家 代仕男

質屋にも二人して行く仲のよき

蛇が皮を脱ぐようにまた離婚した

山の駅キャンブ疲れの荷をゆすり

大阪府 早川 清生

パトロンが替わり香水が替わり

僕んと今では妻が実力者

日本に生きて生涯神を見ず

下関市 中村 九呂平

大阪市 本多 柳志

古い話役場は使丁呼んで聞き

恋愛が実のらず床屋替えてみる

仏壇を退けてテレビの場所を決め

万歳の音頭とったがもうおらず

奈良市 宮口 笛生

ゴールインのように先輩死んでゆき

賭将棋に生きすててこの脚細し

大阪のネオンが写る大ジョッキ

満よりは三つも若い定期券

堺市 辻 圭水

生駒山上

改札はおつもの方を見て通し

この暑さ用ある人の多かりき

飛行塔このまま飛んでしまいたく

出雲市 原 独仙

この暑さトンボまだ追う子の元気

大阪市 西川 晃

稲の出来より蝗の捕れた頃を恋い

加賀市 中松 恒雄

減るぶものの脈搏を聴く釜ヶ崎

岡山市 江国 幽谷

一字違いがどうにもならぬ宝くじ

共産党が見向きもしないほど貧し

ネクタイを変えるたんびに噂をし



きき過ぎてゐる冷房へ苦情が出

岡山市 光 好 陽 子

大声で帰って来そうな新仏

冷房を出れば体に火がついた

西宮市 樋 口 舟 遊

法螺をまた吹いてるという顔になり

後学にするとストリップのかぶりつき

高砂市 吉 原 紅 月

西瓜の皮踏んで彼氏にすりつき

娘もう父を煽てる術を知り

生ワクチンババも会社を休まされ

大阪市 石 倉 旅 風

日曜日私自身の顔になり

夏の夜を開けて寝られる家に住む

死んでからガラリと寝める側にたち

西成に住んでいくらか染まって居

ステテコの涼しさを知る釜ヶ崎

大阪市 魚 住 満 潮

西成事件

警官も暴徒とおなじ顔をして

ワイら知らぬワイら知らぬと釜ヶ崎

不快指数みんな頭へ来てしまひ

恐わ恐わにオカマも野次の中に入り

釜ヶ崎暴徒は夜の顔になり

しゃばはいいなーこんな大きなうさばらし

愛媛県 村 上 旭 童

暴落をするかもしれぬ程に出来

釣って来てのむ約束の竿をもち

扶助料をためたお金をかすという

十年はもつかに農機具屋があわて

倉吉市 太 前 鳴 情

反抗は辞典を繰ってつきつける

サングラスはずせばまぬけた顔であり

混浴にまだ男なる血が流れ

鳥取市 北 村 三 歩

一文もないから黙ってることにする

まかしときまかしときと三振し

組合に出てから楯をつきとおし

神戸市 傍 島 静 馬

夏休み日記につける用をさせ

女には勿体ないよな毛髭出し

大阪市 河 井 庸 佑

三人目妻ムウムウを買うて着る

不快指数避暑から帰れば又上り

大阪府 谷 沢 好 祐

早退はガールフレンドから電話

買うということが楽しいのも女

日 和 山

亀ならで船で行きます竜宮城

泉大津市 高 津 徹 也

欄干を背景にしたスナップは京

文鳥が又水あびをした盛夏

愛媛県 榎 紫 光

キャンプから女にされて戻って来

疑われそうに人妻話しかけ

青森市 工 藤 甲 吉

キャバレーの火事を女房嬉しがり

声を聞くだけの電話をかけて来る

テレビ以来月月の本早過ぎる

ライターはあるがタバコはない男

ふるさとへ腹を抱えて帰って来

玉野市 伊 原 明 林

不快指数子の泣声と妻のぐち



スピッツの御入浴へ客待たされる
サングラスの女に道をよけさせ

豊中市 林 夢 虹

赤トンボリカ子の夢の中で飛び

まだ恋を知らず少女のうぶ毛濃し

狼が祈れば飢えた声となる

西宮市 山本 一 傘

またやったんかと踏切の人だから

金が欲しこんな気持が顔に出る

P T Aに飽いてこんどは猫を飼い

大阪市 今 西 生 薑

抱いてネと茶の間のテレビ声高い

タイミング悪くたわけとどなられる

将棋倒しこらえた女の固い肘

京都市 室井 八 九 寸

ガム煙草アロハは口を休まさず

紙だけと称する中味金五万

奈良市 内 海 敬 太

秋近しノートに落ちる灯よ

法学部助教授資本家は敵と言う

岡山県 横 山 一 声

涼み台去年も聞いた自慢なり

もう起きなと言わぬばかりの蠅叩き

小松市 関 戸 宗 太 郎

縄のれん尻突き出して娘が覗き

研究を讀み出資をことわられ

卒業写真万年筆がみな光り

石川県 高 山 涼 髪

けったいな帽子マネキンには似合い

血圧にわずかの株がひびくなり

嫂に縁遠きことなげかれて

美称市 安平 次 弘 道

窮すれば通ず歯で抜くビール瓶

労働貴族酒焼けの顔でアジリ

アドバルーンが見ていた昼の情事

宇部市 平 田 実 男

下ッ端に惜しまれ左遷の荷をまとめ

脱ぐとこを覗けばモデル腹を立て

大阪府 高 橋 尚 史

若い娘の機嫌もとります課長です

一命をとりとめてみりゃ中風なり

うどん屋と言わず食堂してまんね

同

舟

近

詠

須坂市 高峰 柳 児

耳痛い話を蠅叩きでそらし

孫抱いてくすぐられてる不精髭

いつの間に秘書にゴルフを追抜かれ

零落れて昔話しをまだ捨てず

和歌山市 秋 月 宏 方

あすも生きん行水をして月をほめ

電化にも遠く困扇の夕涼み

A少年署でも町でも困りはて

今治市 長 野 文 庫

外に着るものもあろうに赤パンツ

黒眼鏡かけても小型馬鹿にされ

例外を例に弁護士無罪論

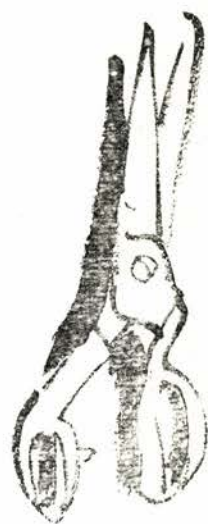
大洲市 米 沢 暁 明

親類じゃ帰宅は今日になっている

章太郎良重の芸も土産なり

腕白ぐらゐと夫気にもせず

新聞 柳壇の 虚實



東野大八

「私が川柳をやりだしたのは、新聞柳壇からでして……」

こういう柳人が案外に多い。

このことは、何も柳壇とは限らない、俳壇だって歌壇だって同様で、こうした読者文芸欄は、人をひきつける何かをもっている。

その何か、とは自分の作が、自分の名とともに活字になり、大勢の人々の眼にあれる、という魅力が第一、つぎには誰でも入りやすくしてまた出ていきやすい、いかなれば気ままな、意志の自由さがあげられよう。

一方、新聞を作る側になると、中央、地方紙の別なく商業紙という名のつく以上、一部でも売らなければ稼業にならない。読者の興味や関心をひく、あらゆる紙面企画で頭を悩まし、その紙面構成はすべての各層、年齢老幼の別なく眼を配る。そのなかに当然入ってくるのが読者文芸と名のつく歌壇、俳壇、柳壇といったものだ。

新聞営業のコツとして「読者の名を一人でも多く載せる」ということがよくいわれる。その要請に応えうる手近かな道は、何よりも読者文芸にしくはない。さらにその扱いも詩と同様「短きをもってよし」としている。つまりコントや作文より、短歌がよく短歌より十七字の柳俳がよい。なぜなら活字の行数が節約できて、できるだけ読者の名が載せていけるからである。

「今日の新聞見たかい、おれの作った奴が載ってるんだ」
この口伝では大きい。家内から友人親せき知人職場へとそれがひろがっていき、掲載紙はPRされ、ご当人においては感激の度合に応じて同じ新聞をかためて買ってくれる。その上、その人間は、当自分分の作品を掲載してくれた新聞からは離れない。

しかし、こうした人たちは定連化していくと、また別の面も出てくる。純真な、自分の作ったものが載っている、という感激が薄れてきて、新聞への「馴れ」が出てくると、人によっては他のところへも手を出す欲が出てくる。それは「佳作呈賞」に尽きるようだが、知事賞のつく新年文芸などは、ありとあらゆる分野へ進出するスーパーマンぶりを発揮する。その量は、平素の投稿量の十倍以上にものはね出る。山と積れた投書の上を前に、選者も係りもニガ笑いするが、この山の中にはきまってる。「居候三ばい目には——」のあの句が川柳欄に臆面もなくまじってくる。

こうした一種のマニエ的定連はどこにでもいる。こうした連中になると選者も心得たもので、三度一度しか抜かない。頭から黙殺してもいいのだが、こうした定連こそ逆に、気長なその新聞の固定読者でもあるからだ。

これがまことに厄介なのである。中央一流紙になると、斯界の最高權威を煩すだけの力をもっているけれども、地方紙になるとそうはいかない。よしんば中央の大選者をもってきたくしても、
「地元こんな先生がいるのに——」
とローカル色尊重こそが地方紙ではないのか、と逆ねじを食う。こういう苦情は、グループ活動の強い地域ほど顕著で、新聞社もその稼業柄、その声をとり入れざるを得ない。かくて地元文化育成のため、という名目でオクターヴを下げた地元選者の依頼となる。

ところがこの地元選者なるものがまたコトで、甲乙つけ難い上に保守、革新の二派はつきものときている。甲をたてれば乙がむくれる、乙をたてれば甲派がうるさいのである。

私の以前の社では、あまりこの両者がうるさいので、第三の選者をもってきたら、甲乙どころの騒ぎではなくなった。
「あんなヤロウを……」
「新聞社も新聞社だ、どこに眼があるんだ」
ということになる。つまり「あんなヤロウ」が、書きカットで半歳間も新聞紙面で載せられることに、その師匠、先輩、仲間がシットまじりのそりの限りが出てきて、人のいい選者なら「もう新聞選者はご免です」と逃げ出す。そうかと思えばなんとそしられようとわが人生観にものをいわせ、てこでも動かず押し切る御仁もいる。結局はそうした人が最後にはトクをして、結構地元で名が売れ、他の新聞の選者にもちろん、中央一流紙の地方版の選者の口まてかかってくる。

こうした選者になると、新聞のコツを妙に心得ていて、
「この辺地からは作品が来ないので、月並だがここからの一句を添作して天位に抜いておきました、きつと地元では話題になりましたよ」
と如才なくいう。これには社もヨワイのである。

新聞読者欄は水準が至って低い。低くつて一句もロクなものはない。しかし新聞紙上にその欄が存在する以上、休むわけにはいかない。そこで選者はグループ内の連中に依頼し、同人誌の投句やその二番せんじをのせる。結局はそれが仲間もめになってしまふ。それが社の係りでわかり切っているも「それはそれはご苦労様」にして扱ってしまうのである。

グループ作品の扱いも、佳句秀句の連作であつても常に一人一句で、赤インクのスダレつきで版にされてしまふ。読者作品はつねに「一人でも多く載せる」のがコツで、決して作品本位ではないので

ある。
要するに地方文芸欄はど、文芸
そのものをプロックするものはない。



事件記者

工藤 甲吉

い。それが新聞文芸の結論である。

新聞記者というものは、一般にスリルと冒険に満ちた日常生活だろうとみられがちだ。『記者というのはおもしろそうだな。事件があれば警察そのものの捜査をやるし、どこへでも車で走り回る……』というのは、どうもテレビの事件記者が『記者の鏡』みたいに思われているかららしいが、現実にはあれほど花やかでリズムカルなテンポのものでもない。ところでつぎにわが同僚のメモ二、三を紹介しよう。

Aのメモ

A記者はたまたま早朝、警察署の宿直室に顔を出した。近くの村に出かける途中、習慣的に顔を出したもののだが、顔なじみの巡査とムダ口をたたいているところへ「強盗がはいり、一人がケガをしたらしい」という村の駐在さんからの通報。A記者はさっそく現場へ飛んだ。ところが到着して

ると殺人事件だったのである。現場には村民が不安そうにむらがっているが、警官はまだ一人もいない。A記者は内心「他社を完全に出し抜いた」という満足感と同時に写真を撮ってさっそく本社に第一報。夕刊は完全に他紙を抜いた。ところでこの犯人だが、それから二週間以上たっても一向にホシが割れない。警察もあせり始めていた。とある夜、A記者がゆきつけのバーで酒を飲んでいたら、かねて手配していた差し入れ屋の「シンバ」から急報があった。「どうもMに対する差し入れの注文があったらしい」というのである。Mという男がくさいとはA記者もきいていたし、それとなく調べてもいた。彼はそれこそオトリ刀で警察へかけつけた。しかし相手はナシのつづて。手を変え、シナを変えて追求したが、知らぬ存ぜぬの一点張り。そこで思いついたのが駐在所というものの

存在である。大事件の容疑者を逮捕した場合、本署は目立つため、留置場のある駐在所に拘留する例があるからだ。A記者はS村の駐在まで車を飛ばした。しかしここも応答なし。『今晩は留置場はカラッポですよ。なんならのぞいてみなさい』というワケ。だがここで折れるワケにはいかない。第一、駐在所には用件のないはずの特捜本部の捜査係長がいるのである。A記者はいったん外に出て対策を考えた。その結果、意を決して留置場をのぞきみることにした。留置場は田んぼに面した裏側にあり、三十センチほどの明り窓がついている。ますしのび足で裏側へ回った。屋根づたいに留置場の上に出られるというワケだ。身の軽いトランジスタ型のA記者は通風筒によじのぼり、さらに屋根に伝わった。深夜のこととして、足を動かすたびに「ミシッ、ミシッ」と音がする。見つかったらおしまいである。息を殺してはうようにして明り窓までたどりついた。心臓の鼓動がやたらに高く鳴る。彼はおもむろにカメラをとり出し、

そっと明り窓に顔を近づけた。やはりいたのだ。Mだ。Mに間違いない。横向きに寝転んでいた。彼はカメラをかまえた。その瞬間である。一喝『そこにいるのはだれか——』彼はあやうく屋根から転げ落ちるところだった。しかし彼は彼の目で見たのである。

る。『犯人を逮捕』のスクープをしたのはいうまでもなかった。だがA記者はいまも『屋根によじのぼった時の姿だけは女房には見られたくない一瞬であった』と。

Kのメモ

一日を終えてこれから夜の街へでもと思っていたK記者のところへセールスマンの友人T君から「Q村で長男が父親と妹を殺したらしい、という話がある」と知らせて来た。

それとばかりに車を飛ばしてウツサの家へ駆けつけ、むらがる人々を押し分けて屋内にはいり、電灯が消えているので手さぐりで電灯をみつめ、スイッチをひねってあたりを見回した。瞬間、K記者はあっという間に声をあげてしまった。

そしてそのままからだがかくかく動けなくなってしまったのである。薄暗い電灯に照らされた破れ障子には血のはね返った跡が生々しく、寝室の床の中には老人と少女が頭と顔をめった打ちにされてすでに事切れ、その枕元には、泥を塗ったように真っ黒な顔の青年が一人すわっていて、着ているデテラについているこれも泥のような黒いものをしきりとなめ回していたのだ。もちろん黒いものは血。その口の辺は真っ赤、目だけは異様に光り、K記者をみてニタリニタリと笑いだしたのである。

カメラを向けるどころか口もカラカラに乾き切ったK記者は立ちつくすこと約二十分。駆けつけてきた警察署長さんの「どうしたのだK君」という声にはじめてわれに返ったのであった。心臓も凍るようなこの体験はもちろんスクープとなったが、K記者は以来、いかに真夏の暑い日も何年か前のこの場面を思い浮かべるとさっと汗がひくという。

Bのメモ

S医師はB記者の友人である。酒も飲み、女も好きで、義太夫などもうなるかと思えば、政治家でもある。このSが戦後の自治体警察時代に公安委員をしていたとき、「女を殺した」という事件を起こした。

今はこの町も合併などして市制をしているが、当時は人口一万そこそこの城下町のこと。しかも公安委員をしているSが、注射で学生時代の恋人だった女性を殺したというのである。殺されたという女性には町の旧家の生まれて若いときはそれこそ「町一」の美人（当時もちろん美人には違いなかったが……）それが学生時代Sとの恋が成らず、他家に嫁ぎ、その後夫に死別、胸を病むなどして生家に戻ってSのもとに通院加療中にSの注射で死んだというのである。ともかくすばらしいニュースだ。警察は火葬をストップさせて

死体を解剖させ、Sを任意出頭で取り調べることになった。そこで困ったのはB記者である。第一、どのようなことがあろうとSが人を殺すような男ではないということとをBはよく知っているからである。BはSに会った。話によると、いつものとおりいつもの注射を打ったら間もなく苦しみ出した。あわてて応急手当をしたが助からなかったというのである。他紙はいっせいに書いた。だが、

「Sに殺人の疑い」とはSを知るB記者にとってとうてい忍びがたいものがある。Sにだって妻子もある。親兄弟もある。容疑は容疑でも「殺人の容疑」はあまりにも酷だ。Sとその女性との関係はいまのプライバシーに属することでもある。B記者は迷ったが覚悟を決めた。他紙がひとときわ派手にジャンジャン書き立てる中を、断じて書かないということに……。本社は怒った。殺したのでなかった

らSの「カシ」をたてるためにも、
けというのである。しかしBは妻
がなかった。Sを信じていたから
である。事件はその後検察送りと
なった。だが、もちろん何事もな
かった。Bはほっとした。むしろ
S以上にである。B記者はいまも
いう、そのときのつらかったこと
を。そしてなでるのである。よく
も現在もつながつているその首の
あたりをである。

不二田一三夫

日本新聞協会が昭和24年度の新聞標語の代表作

自由な新聞と独裁者は共存しない

この句を発表してから36年度の、新聞は動く世界の正しい目

たのであつた。

からバスで約五十分の所にある。上川駅着は七時過ぎだった。長い夏の日も北の国ではすでに暮れかかっていた。温泉行きのバスが待っていたがすいていた。バスはまだ人待ち顔に時間が来ても発車せず、旅人を慰めるようにラジオが鳴っていた。大阪で私の好んで聴く「オヤカマ氏とオイツガ氏」だった。柳沢真一、淡路恵子の会話も妙になつかしく、一瞬自分の居る所を忘れさせた。そこへ東京（？）のBGか学生らしい三人の娘さんグループが乗り込んで来て盛んに東京弁でしゃべりだした。その会話も私には北の国に居ることを忘れさせるに十分だった。私は一言もしゃべりはしなかったのだ。

まで十三の機語が新聞週間にあらわれた。第一回の24年度はソ連も原子爆弾を所有していることを示したが、独裁者のこわいのは日本だけではないようだ。

揺らぐ世界に揺るがぬ報道

この標語の27年度には米国の水素爆弾実験や、エジプトの民族運動が激化したり、わが国では破壊防止法が公布されたりして世界が揺れていた。



地球の丸さを見た話

北川春巢

ガダリーリ少佐は「地球は昔く見えた。」と云い、チトフ少佐は「空気にいけると空気が色が美しかった。」と云った由であるが、「地球の丸さを見た。」とは旅行であつた。

私は旅行が好きで、学生時代には夏休みなどよく出かけたものがある。もちろん一人旅である。所が学校を卒業して、医者という仕

所がこの七月、札幌で行われる学会に出かけることになって、ついでに北海道一圓の旅をしようと思いついた。私用で休んでの旅行は思いも及ばないのだが、出張命令を受けての公用旅行である。学会は七月初めの三日間行われるのだが、国鉄を利用しての往復なの

大阪発は六月二十七日。だが私は学生時代には経験しなかった一人旅の淋しさを味わった。朝八時伊丹発以来、夜八時ホテルに着くまで、物を云わないということでは、実に淋しいくらいことであった。学生時代と違い、すましこんで飛行機に乗り、列車に座っている

たのであった。

扇雲峽温泉は石北本線の上川駅からバスで約五十分の所にある。上川駅着は七時過ぎだった。長い夏の日も北の国ではすでに暮れかかっていた。温泉行きのバスが待っていたがすいていた。バスはまだ人待ち顔に時間が来ても発車せず、旅人を慰めるようにラジオが鳴っていた。大阪で私の好んで聴く「オヤカマ氏とオインガ氏」だった。柳沢真一、淡路恵子の会話も妙になつかしく、一瞬自分の居る所を忘れさせた。そこへ東京(?)のBGが学生らしい三人の娘さんグループが乗り込んで来て盛んに東京弁でしゃべりだした。その会話も私には北の国に居ることを忘れさせるに十分だった。私は一言もしゃべりはしなかったのだ。……

ホテルへ着くともう異つ暗で、すぐ入浴、ついで食事となる。女中さんは新米らしく付近の様子も知らないで、番頭さんと呼んでもらって、明日のバスの時間やら、見るべき名所などを聞き聞かした。私は番頭のためにビールを一本追加して、一しよに飲みながら色々のことを尋ねた。番頭は私がかくだを巻いていると思ったかもしれないが、実は一日中物を云わなかったのを、私はこれで埋め合わせしたのである。番頭の東北訛りが妙に耳に残っている。

翌日は番頭のすすめに従って、少しゆっくりと扇雲峽を見物、再び上川駅に出て、昼前の列車で美幌へ。列車内では小樽からの中学生の修学旅行団に乗り合わせ、色々としやべることができた。しゃべるのは楽しいものだ。

美幌駅着三時半。四時のバスで美幌峠越え川湯温泉まで三時間の

すぐ入浴、ついで食事となる。女中さんは新米らしく付近の様子も知らないで、番頭さんと呼んでもらって、明日のバスの時間やら、見るべき名所などを聞き聞かされた。私は番頭のためにビールを一本追加して、一しよに飲みながら色々のことを尋ねた。番頭は私がくだを巻いていると思ったかもしれないが、実は一日中物を云わなかったのを、私はこれで埋め合わせしたのである。番頭の東北訛りが妙に耳に残っている。

翌日は番頭のすずめに従って、少しゆっくりと駒雲峽を見物、再び上川駅に出て、最前の列車で美幌へ。列車内では小樽からの中学生の修学旅行団に乗り合わせ、色々としやべることができた。しやべるのは楽しいものだ。

美幌駅着三時半。四時のバスで美幌峠越え川湯温泉まで三時間の

翌日は番頭のすずめに従って、少しゆっくりと脳裏峽を見物、再び上川駅に出て、最前の列車で美幌へ。列車内では小樽からの中学生の修学旅行団に乗り合わせ、色々しゃべることができた。しゃべるのは楽しいものだ。

美幌駅着三時半。四時のバスで美幌峠越え川湯温泉まで三時間の

美幌駅着三時半。四時のバスで美幌峠越え川湯温泉まで三時間の

ドライブである。美幌駅では偶然にも国立大阪病院のS部長に出会った。彼は私と大学の同級である。彼はその属する学会がもう札幌で終わったので、のんびりと周遊中だとのこと。彼には連れがあったが、私達は色々としやべり会って、今日は昨日のような物云わぬ苦しみを味わうことはなかった。

バスは満員だった。定刻に発車したが、ガイドの説明があるもので、みんな今までのおしゃべりはやめてそれに聞き入った。丁度内地は中部地方豪雨の時で、見晴らしの雄大さで名高い美幌峠は霧のためにそれこそ三メートル先きも見えない。それに少々寒くなってきた。バスはここで十分間休憩して、下車して自由に展望を楽しむことになっているのだが、ほとんど誰も下車する人はいない。腕に自信のカメラマンが数人、それでも下車してシャッターを切っている。私は下りて小用だけを足して来た。その時の句が、

美幌峠 小便だけで引き返す
春 渠

バスはこれから下りて、下るにつれて今までの濃霧は嘘のように晴れてきた。日も照ってきた。寒さも感じなくなった。狐につままれた気持、というのがこんなものではあるまいか、と思った。間もなく木の間隠れに屈斜路湖が見え

だした。その水の色の青さの美しいこと。長径一三キロ、短径七キロの勾玉状の火口原湖だが、私達はその長径の一端から見渡していただのだ。バスははよい所でしばらく停車して、下車はさせないが見晴しは十分に楽しませてくれた。車窓から写真を撮っている人もある。天然色だったら美しいだろう。その時である。

「あれ見ると、地球が丸いってことがわかるじゃないのー」
車内から声が起こった。一瞬みな黙って声の方を見た。昨夜のバ



旅二題

阿部佐保蘭

五月に結婚した娘の新居を見て来ようと愚妻と連れだつてこの夏信州の太町と云う処へ出かけた。

台所で話の尽きぬ娘の新居

佐保蘭

娘の新居と云つても住宅なのであるが、そこへ一泊して次の日婚殿の案内で木崎湖へみんなで行きモーターボートに乗ったりして半日を愉しく過ごした。その木崎湖の辺りに仁科神社と云うお社があり、田舎にしては立派な社殿に社務所もあり、境内には碑も建つて

スで見た東京(?)の若い娘さんグループの一人の声である。私は一しよのバスに乗り合わせていたことも今まで知らなかった。

なるほど、そう云われてみると、一三キロの対岸は見えないが、湖の水の果てが少しもり上って球形になっている。地球の丸さを見せつけられたような感じだった。かつて太平洋で水平線を見たことはある。そして地球が丸いなんて考えられない、とその時は思つたのだが、今はまさに地球の丸さを見たのであった。

今夏は大分古いお話で恐縮ですが、昭和八年の夏に東京から東京片道計算の周遊切符で静岡に於る全国川湖大会を振り出しに三週間の川湖の旅に出たことがあった。川湖を始め丁度六年目一番熱の入っていた頃なので、初めて川湖の旅に出るのだから洋服を作ったのはいいが、ネクタイが無い。丁度有合せの白の平呂の残り切れでネクタイを作らせたが、真白では恰好がつかないので、そこへ模倣師の方に頼んで、今は止ま前田雀郎先生の

雀郎

という句を丁度出る処へ上合よく描いて貰つて、これでよしと川湖の旅に出た。最初静岡で置かれた全国川湖大会へ東京側の皆さんの後について出席した処、運よく句が抜けて花川洞氏に続いて全国で第四位の成績を獲得した。これに力を得てこの機会に出来るが多くの先輩柳友に逢つて来ようと、各地を廻つたのであるが、その時大阪では朝田新木君の室内で当時キングと云う喫茶店を経営して居られた原生路郎先生柳友を初めてお訪ねした。今から廿八年も前のことですから、先生も霞乃女史もお若く御元気でいろいろ川湖の話をして下さつて楽しい一夜を過ごさせて戴いた。

両親の故郷峯山へ行く途中丹後

宮津の宮城晴亭氏を訪ね、山嘉旅館で痛飲談話に花を咲かしたのも今は思い出となった。話してる中に晴亭氏が遠い親戚に当ることが判明、今更に世の中は広いよう

で狭いものと云うことが判った。宮津の花街を二人で抜けた時、噂と囁いて誰も袖を引かないので、僕が若過ぎるのかと思つていたら、後で判つたことであるが、晴亭氏が当時養生堂のチエンスストアを経営して居られ、所謂土地の顔役だったので、一緒に歩いていても反応がなかった事である。日本三景の一つ天の橋立を見物して御先祖様の眠る峯山の亡母の実家を訪ねた処、この土地では朝が早いので町中午後になると日寝の習慣のあることを知った。

故郷の杜寝の中の人となり

佐保蘭

こんな句の出来たのもこの時のことである。最近はこの辺でも労働時間が八時間制になったと聞きますので、こんな日寝の習慣も変つていくことと思います。帰りに神戸でふあうすとの紋太先生のお宅を訪ね、先生を中心に東洋鬼、一狂その他の先輩柳友と飲談時の経つのを忘れた。宝塚で花詩集を視て、名古屋経由三週間に東

京の土を踏んだ。
しみじみと我が家の枕、我が枕

一九六一、九、一

佐保蘭



みち (一)

戸田古方

むかしのみちは歩くみちであり、今のみちは自動車のみちであります。

この夏、七五〇キロを五日間にわたって、バスで走ってまいりまして、はつきりそのことがわかりました。

東海道と中山道をさぐるというふれ込みでありましたが、なかなか思うようにみる事ができませんでした。

いつも、むかしのみちを横目であらんで通るばかりです。それらしい家並が窓の右か、左のはるかかなたに見えてはいましたが、そのまちの中へ図体の大きなバスは入ってゆくことができなかったのです。

戦争のすんだすぐあとでできた地図を見ますと、だいが、まちの中をみちが通っています。今日通ってみますと、ほとんど家のあるところをさけています。東海道の国道一号线ではことにひどいようです。

市街地に入れば人道もあります。が、その他では、ほとんど歩いている人影も見かけません。

あるくのはあつち微動だにせず空気バネ

むかしの東海道は朝鮮使節やポルトガル人のカピタンあたりの書いたものをみましても、みちのよいこと、設備の行とどいていることとでみんな、口をそろえてはめていたものでしたが、今のみちの皮肉をいっているようです。ところどころで修繕中につつかり、一方通行やまわりみちをさせられました。

新聞紙一枚の補装に二千円はかかる。地盤が悪ければ六、七千円もつくといいますが、少くとも二・三〇センチ以上のものにしてはいいものです。薄いコンクリートでは、みちの方へ同情したくなってきました。

こんなところと思うようなところにもガッリン・スタンドが立ち

っています。

リッターで一〇キロ以上も走る小型から、三、四キロも走れぬバスやトラクタまで。私どものバスは予備タンクまでもつていたので

すが、それでも途中三回はかり一五〇リッターずつ補給してしました。街道沿いにはらまかれる排気ガスの量も一寸考えてみたくなりました。

それから、みちでみられるものといえはモーター・インです。モダン雲助たちののどをうるおす茶店です。

むかしは東海道一五〇里、六〇〇キロの間に五十三もの宿場があり、その間にまた一里塚もあって、それぞれ旅をエンジョイできようになつていました。

こんどの旅で、宿場のいくつかを通りましたが、目とめることのできたのは草津と、赤坂、御油ぐらいで、あとは匂った程度。ただうれしかったのは、第一日にとまった桑名の宿が旧東海道にそつ

ていて、たたずまいが、いかにも一里塚のように思われたことでした。

その頃も影をつくった一里塚

草津では本陣なるものを、赤坂、御油の間ではむかしのままの松並木を歩いてみました。もう一つは浜名湖に近い新居の関趾を見たことでした。

本陣というのは昔の大名が道中するときにとまった宿です。たいていの宿場に一つはあったのですが、大名同志が鉢合せすることがあるときの用意に脇本陣というのがいくつあるのがならわしでした。大名の宿泊はたいそうなもので、何カ月も、時には半年も前から申込んで、到着の日には、本陣の主人はもとより、一同、正装の上下に威儀を正して出迎えたものです。表には「……様御宿」の札が格式によつてきまつた数だけ、木とか、紙とか、寸法、大きさもさだめ通りのものを立てました。

本陣は小型ながらちゃんとした門があり、門を入ると一寸した広庭で、ここで勢揃いをするのです。乗物や大小の荷物を運びこむ間口の広い附属の建物もあり、草津では、本陣となるうちがそれであつたそうです。

支閥には広い式台があり、一段上ると支閥の間になつています。大名の泊るのは上段の書院で一番

奥まつたところにあつました。万一の用意に避難の裏門もついているのです。本陣の敷地は可成りの広さがありますが、泊れる部屋はそう沢山ありませんので、全部の供は脇本陣や一般の宿屋、又は民家に分宿しました。何百人という行列の中には、相当大ぜいの人足がいますが、これらは、その土地の百姓が助郷というてひっぱり出されたのです。ずい分迷惑な話でした。

草津の本陣の日記をみますと、維新の頃、明治天皇や和宮さまが泊まられたり、住まれたりされたことがのつていました。それから日向佐土原の藩主島津氏がここで客死しています。むかしの旅が長かったこと、旅が旅でなく生活しながら日数を重ねていった様子が手にとつて見るような気がしました。

この草津と中山道の大井宿の本陣をくらべてみる予定でしたが、奥三河から、美濃へ抜けるみちが荒れて通れませんでしたので残念ながらあきらめねばなりませんでした。

赤坂、御油の間はわずか六、七丁、一〇〇米もありませんが、すばらしい松並木でした。天然記念物か何かになっているような立札も立っていました。弥次さん喜多さんが狐にだまされたとかいう話のところ。バスをお供にモダン行脚というところです。真つ昼

間、真つ蒼に晴れた空へさし通すようにのびている松、松の谷間を、一足、一足がおもしろいような心地をしながら歩きました。

雲助がついて来そうな蟬時雨

御油の家並みはむかしのままでした。通った所がかつての遊女町であったのかも知れません。幡磨の室の津でみかけた家とよく似ていて、それよりさらに手の込んだつくりでした。好事家をたのしませる比較的低い軒の太い二本の線に、喰いこむように数でゆく格子の縦の線がいくつもかかっていました。二階の格子のさきえには斗まです。二階の格子のさきえには斗まです。二階の格子のさきえには斗まです。二階の格子のさきえには斗まです。

御油は爆撃されませんでした。爆撃の価値もなかったからでしょう。三百年間のんびりくらしした習慣が東海道線の敷設を拒みつづけて、宿場では生きられず、出直して、やっと中型の農耕となるよりはかはなかったのです。若い御油は原子炉設置に反対している人々に、ここに他山の石がありますよといっているようでした。

新居の関はそれほど人々がやましくいわないのですが、箱根よりも古く、日本で只一つのこつている関所です。しかも国道一号线にそっていただけでした。三十三間堂ほどではありませんが東西に長くのびた建物です。元祿頃には

吉田藩にまかされましたが、それまで、幕府の直轄であったのです。明け六つ午前六時より暮れ六つ、午後六時まで一二時間だけ人を通し、それをすぎると、幕府に直接関係の重大な要件以外の通行は許されませんでした。宿場にはぎわいました。入鉄砲と出女が一番きびしく取締られ、本物の関所手形も保存されていましたが、それは思ったよりもずっと大型で、達筆でかかれた見事なものでした。

幕府の手から今の豊橋、当時の吉田藩に警備が引つがれてからも葵の紋をかかっている以上、直参扱いをうけました。葵の紋といえは、岡崎城の古瓦に写生風な三枚の葵のついた葵の葉が、例の見慣れた三葵になるまでのうつりかわりを興味深く見せてくれるものがありました。岡崎は家康の生れたところ、徳川家にとって父祖の地でありました。名も知らぬ街道ぞいの寺の幔幕にも三つ葵がついているのをみかけました。京都の警護と目付役をかねた彦根など十五万石もあって譜代として大藩ですが、三河へんには小さな譜代大名がちらばっています。渥美半島の半島部のなかほどにある田原藩などはわずかに一万二千石、この家老が、かの波辺華山でした。幕府は譜代の藩主や重役を諸役につけた時代ですから、時代に警備をうちならすような思想を發表させ

しなければ華山も幕臣として重んぜられていたかも知れません。

新居の関の話が出ましたが、畿地方から中部地方へ入る二つのみちには鈴鹿と不破の関がありました。遠い王朝時代のこととして、そのあととはたずぬるべくもありませんが、その頃の京の守りでありました。

東海道は鈴鹿を、中山道は関ヶ原を通ります。いずれも越えるにむづかしい高さではありません。鈴鹿は鉄道の幹線からはなれていますので、通ってみても人家は少く、東海道本線沿いの関ヶ原はずっと農家がみえかくれしています。鎌倉時代の東上りはむしろ今日の関ヶ原越えて名古屋へ出て、鈴鹿の方は江戸時代に開けた街道だったということにも関係があるかもしれません。

草津から石部、水口、土山とたらだら坂で、いつの間にか頂上近くに開かれたトンネルに出ています。トンネルから東はかなりの急坂ですが、それでもバスでは一瞬のうちに坂の下の宿場へつづいていました。関ヶ原では国道と鉄道の間に古い中山道のみちがみえ、松並木がひろひろと間をおいて立っていました。岡崎、豊橋の間でも、浜名湖のあたりでもそうした景色はみかけました。

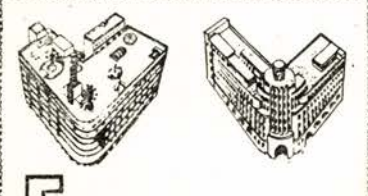
あれも東海道かとみえる松並木

バスの旅は列車よりきゆうくつです。どこでもとめられるとはいいながら自家用でもないかぎり、一寸おしっこというわけにもまいりません。冷房車でしたので、舗装のないみちにきても、窓をあけていませんので、ほこりをかぶることもなく快適七、不快指数三といったところですか。

バスとは石油を燃料にして動力をうごかして走る車です。第一日には四日市の石油コンビナートを訪れて、大協石油の精油工場を、そして第二日にはこの車をつくっているトヨタ自動車の工場を豊田市に見学しました。

石油は動力としてより今日は石油化学工業として広い仕事をしていますが、とにかく原油から多目的に副うように精製しているのがここ四日市の今日の姿なのであります。四日市は文字通り爆撃で壊滅の底から立ち上った不死鳥であります。精油塔や球状のタンクがたかまですして位置よくならんでいました。それは現代の壮観であり、ダイナミックな構図でもありません。

機械のことには弱いの、大協石油の大火の話や、伊勢湾



「お買物」は近鉄で!!

アベノ上六
近鉄
アベノ上六 77-8331
上六 77-3331

台風のと、木の中を歩いた人の胸に浮いた油の層が模範様をつけたことぐらいいより耳にとまりませんでした。

自動車をつくるトヨタの工場はというと見渡す限りの丘陵地帯に出来上った元町工場でしたが、やがて、今、空である丘を、こんな工場で埋めつくす予定だそうです。一分間一歩少しのゆるい速度でうごくコンバナーにのって四分間に一台の割合で一台ずつ乗立ちゆく姿がいかにも今が二〇世紀の後半であることを思わせてくれました。

おもしろいところにくればいそがされ

それにも増しての壮観は出来上った車を降送する販売会社がまるで西部の大牧場の牛のむれでもみている如くパブリカ、コ罗纳、

道草

(三)

麻生路郎

道後温泉・又新潟

私たち夫妻は北馬子町のへんこつ庵で、狸通君から、鯉のご馳走になりました。この壁には吞平の楽書がうなぎの姿そのままに、のたうちまわっていました。その中では狸通君の画いた狸が光っていたことはいうまでもありません。私も酔筆で壁を汚しました。

道後の宿の川吉別荘へ戻ったら、愛媛新聞の記者がインタービュに来られたので、今度の旅の目的や松山市の印象などをあけすけにしゃべりました。宿の朝、庭先の手のとどくような松の枝にジッととまっている雀の話をいたしました。私の住んでいる常塚山方面は比較的静なところですが、近頃では雀が姿さえ見せて呉れませんが、宇喜多翁については特に力を入れて談しておきました。

それから、わが社が大坂土佐堀の昭和ビルにあった頃、社員だった渡辺晩童君が、吉海町からはるばると懐しい顔を見せてくれました。あの頃は戦時中で、物の不自由の頃だったので、病氣して瘦せて郷里へ帰ってしまったので、氣の毒な思いをしていましたが、今

は吉海町の教育長で、ジャンジャン活躍をしていると聞いて嬉しかったです。妻君のこと、こどものこと、孫のことまで話してくれて話はずきませんでした。無口な老翁も晩童君をつかまえて、何かと談していました。

雨がバラバラと来ましたが、そんなことには頓着なく、狸通君の案内で、「坊っちゃん」が泳いだという道後温泉へ、私たち夫妻に、晩童君を加えて四人連れで出かけました。ここは今では温泉デパートみたいなところですが、昔の面影は残して居りましたが、特別室では浴衣も貸して呉れ、薄茶も入れてくれ、サービスガールもついでに、浴客も悠々たるものです。浴室はほとんど昔のままでしたが、昔はもっと広いような気がしました。栗君の

の句を思い浮かべて、ほはえまじさを感ぜました。浴後一休みしてから、この温泉の中に、皇族の方々のために特設されている、又新潟を見学させてもらいました。おそらく天下一品の温泉です。平素は湯はたたえてあります。お着がえの部屋からお座所から便殿まであります。解説はすべ

て狸通君がやってくれましたが、この解説こそは温泉前に住んでいる文化人だけに狸通君の独壇場でした。

子規堂に憶う

四日は狸通君に、子規堂のある正宗寺へ案内され、住職にも紹介されました。寛永十二年、桑名城主久松定行が深山に移って建てた寺で密山演静禪師を迎えて開山としたもので、臨済宗妙心寺派に属す名利たそうです。元の本堂は昭和八年二月炎上し、その後現住職田中宗担師の代になって壮大な堂宇が再建されたそうですが、戦災で烏有に帰し、今はコンクリートの本堂だけが再建されています。

ここへ、杏子女史も来られたので一諸に子規堂を拝観させてもらいました。子規堂は、もと松山市湊町四丁目、中の川筋にあった正隆家の旧宅を模して建てられたものだそうです。子規堂は中の川の旧宅が取りこわされた時、記念のためその用材の一部を用いて大正十五年この境内に建てられたのだそうですが、昭和八年二月正宗寺火災の際に焼けたため、同年九月に再建されたそうですが、これも又昭和二十年七月の空襲で、本堂、庫裡などとともに類焼してしまつたので、今の子規堂は三代目で昭和二十一年十二月に竣工した建物なのであります。子規堂は俳聖子規を偲ぶよすがとするために、正岡家の旧宅そのままを再現し、支園四畳、客間八

クラウンが見わたすかぎりならんでいるのです。一本の煙草も見えませんが、みな電力なんでしょう。日本は有数な太力電気の国ですが、その太力発電も限界にきておるとか、どうとか。これからは火力とか、原子力発電とか。

私には再遊ながら、こんどの旅行の主題の一つとして佐久間ダムがありました。佐久間は山々山の奥にあって、豊橋から信州の飯田へ出る伊那街道からわかれて、ダムのためにつくられたみちをそこまでのぼってゆきました。前遊とちがひ、ダム建設のはじめからここにいたという、いわばぬいみたいな一人の技術家からいろいろ聞くことができました。

世界的な大工事で、高崎達之助氏がアメリカで同じぐらいの規模の工事の現場をみたことが縁となつて、あちから建設機械一式を引いたということです。工事や機械のこともさきながら、この仕事のために支払わたいいろいろの補償の問題を面白くきました。補償は水没する人家にだけではありません。水没する立木——林業も思いも及ばぬ額になっています。そこについていた飯田線の路線更えには補償の大半をあてたといひます。漁業に専業者はいませんが、数字の出しようもありましたが、完成後には稚魚の放流も試みたといふことでした。

それにしても補償で各目が受取った金は相当まとまっていたので、これを上手につかうかどうかは、その人々の運命を左右しました。開拓地に入植したのなどは成功の部でした。

開拓地は山といわず丘といわずいたるところにみかけました。さらに、さらに努力をかかなくて少しでも豊地を増さねば生きてゆけない日本人なのでしょう。上杉謙信が武田信玄に塩を送ったことはだれでも知っている美談ですが、伊那谷のみちも塩のみちとして発達したものといひます。海岸の渾美半島の「アジミ」は安曇でもと海の人なんですが、そのアジミが信州の安曇郡として人々の移動を物語っております。

江戸時代の東海道は食糧までもって旅をする必要がないほどとひらけていました。山行きのみちや外国旅行をする日本人が故国の味としてなつかしんだものに味噌と鰯節があります。岡崎を巡りました時、味噌中の味噌とでも申すべき岡崎八丁味噌工場のをそきました。

味噌は日本の古い食品であります。今も昔のまゝの方法で作られていました。しかし科学はながく日本人のぎりぎり結着の食品にメスを加えて、今まで知られなかった功德まで教えてくれました。

美容にまできくと味噌を科学する

畳、居間六畳、三畳の茶の間とされてあります。これは子規令妹律子刀自の残こされた図面や、子規の友人柳原極堂翁の記憶にもとずいて設計されたものだそうです。私は斯うした心づかいには敬意を表するのですが、玄關左手の三畳は子規の少年時代の勉強の部屋だったというので、部屋の隅にまことに、お粗末な小さな机が置かれ、その上に笠のない置ラングがおかれてあったので、子規堂をたんねんに見ようという勇氣が、が一ぺんに消し飛んでしまいました。芝居気たっぷりの演出におそれいたからです。

子規の少年時代の使用していた机やラングならともかく、古道具屋のものは、子規なども今に伝説の中の人にされるのではないかと思つたからです。明治の文豪正岡子規は一松山の子規ではない筈です。子規研究者や子規ファンのために、もっと、力強い、有意義な子規堂をつくりあげて欲しいのです。子規堂の世話人や伊予鉄などに、のぞみたいのは見数に等しいものを蒐集される「タマ」を子規や漱石の著作物や、子規、漱石に関する著作物の蒐集の方へ振り向けて欲しいのです。そして子規を知りたかったら、漱石を知りたかったら、松山へ来いと云



保聖子規

う自負を誇つただけのものにしていただきたいのです。時期を失つたら、手のつけようがなくなるものですが、今からでも遅くはないと思います。子規を愛し、漱石を愛するものの言としてお耳をお貸しくださいらばこれに越したよろこびはありません。

再び砥部へ

五日。朝から仙波女史のお迎えをうけ、砥部の星黄陶房にくるまを走らせました。ここは重信川の橋を渡って、そう遠くはなく、砥部の入口とも云えるところでした。陶房主・野本星黄氏は陶共家伊東翠壺氏に師事され日展にも入選されています。ここでは時間がなかったで、いろんな絵の具の性質や筆の運び方などの指導をうけ、作品への揮毫だけをして、他日を約して引きあげましたが、よい勉強になりました。今日はもう帰るというので、砥部の空気を思いきり吸い込みました。佐健君がもう少し生きていたら、膝を交えて揮毫が出来ただろうにと思いました。一たん道後の宿に帰えり、仙波杏子女史、重松茂君に雨の土砂降りの中を松山市駅まで見送っていただき、富田狸通君には松山飛行場まで見送っていただき、また。離陸の頃にはスツカリ雨もあがっていました。十八時二十分に伊丹着、二十時頃にはもう、自宅でお世話になった皆さんの健康を祝してビールの乾杯をいたしました。(この項終り)

▼誤字訂正▲

八月号一九一七の三頁十四行目の「三年後」とあるは「二年後」の誤り、九月号一八ページの三頁十四行目の「昇」とあるは「升」の誤り。

續

川柳書架

(13)

雨譚註万句合

古川柳研究会

★左に「雨譚註万句合序」の一節を抜く。

安永・天明期の川柳作家であった雨譚(うたん)なる人物が、自分の所蔵本であった「川柳評万句合」にいろいろの書き入れをなしたものが、今日残っている。その書き入れの中には、当時の万句合作家の名を記し、又確句と覚しきものには略註を施したりしてあった、後世古句研究の大事な手掛りとなっている。

この略註を附した部分を、その句と共に集めたものを「雨譚万句合」と稱し、更に本士貞氏の編纂に係るものであるが、これは本士貞の稿本のままで残っている。

その後増補加註の雨譚万句合が、国立文学館蔵に収蔵されていることが判つたので、改めて稿本を作り、本士貞の稿本と同じ形式を以て、新しい「雨譚註万句合」が作成せられるに至つた。本書が即ちそれである。(以下略)

★昭和八年・安永元年・四年・五年・六年・七年・九年・天明元年・二年・三年・四年・五年・六年・八年・寛政元年

★昭和三十六年八月十日発行、二〇〇限定、A5版二一六頁、東京都北区堀船一ノ一製紙博物館蔵

短詩私論

川柳の立場から

(山村祐著)

★本書は新人山村祐氏が、あちこちの雑誌へ書いたものをまとめたものである。

★その目次を挙げると、

第一部 川柳は現代の詩として堪えるか。定型と言葉。

口語短詩としての川柳。

川柳誌訪問—川柳よ何処へ笑ふ。

あしあをを消すな。

自由律川柳について(観望)。

川柳時評—句集は墓碑銘ではない。

伝統を継ぐもの。新しい句の理解について。余りにおとなしい川柳人。

第二部 川柳私論以後。

作家と作品—小文二題。

A なぜ川柳を唱えるか。

B 女性と川柳。

誰が考えるのか。視覚・リズム・現実など。

作二部作品の形式とリズム。

根岸川柳小論。

ふたりのリズム。

「煩さい火の粉」後日物語。

戯説川柳三要素。

短詩問答。古典的短詩から現代の短詩へ。

★一九六〇年五月二五日発行。B6版二〇〇頁。定価二八〇円。

発行所、東京都豊島区巣鴨六ノ一三二九森林書房。

★従来川柳詩論の少ない中において本書は臆くべき多くのものが述べられてある。

付、古川柳研究会。★本書は非売品だが、多少残本があるので、実費五〇〇円で頒つそうである。



近作 柳樽



麻生路郎選
北川春巢選

アメリカの移り香をつけ羽田着 福岡市 田口 麦彦
みどりいろあかいおとこ 佐々木市 同
使う金の金と云い切るゴルフ焼け 同
遠方に友あり みんな平社員 同
美女に脚組ませ芸術出来上り 同
ノーマー モアロジ の声はひびかず原爆忌 同
求人難無職の父を通りすぎ 同
器量よし線香花火のはのあかり 岸和田市 内藤きさ子
立ばなしいきなり上で蟬が鳴き 同
声かけて昼寝の乳房見てしまい 同
むぎ茶だけ冷やしてうちの冷蔵庫 同
雨上り先ずこおろぎが鳴き始め 同
絶安へ我家は遠きものとなり 貝塚市 杉本 一鶴
絶安をしても思くなる暑さ 同
ポーナスのおこぼれ見舞に來てくる 同

不快指数九十思考力の空転 出雲市 同
キャンブする子お守り持たされる 同
哀愁の影なく少女綱渡る 同
箸紙について民謡うたわされ 同
レジャーブーム矢張り句は出来ず 同
不合理をつけばあんたは若過ぎる 西宮市 末沢 花美
私(うち)ユーウツですなんと大 大分市 同
療友の手術に 二句 同
月並な言葉ではげますより知らず 同
百合活けて明日の手術をもう云 兵庫県 同
飲(おん)酒戒破りつつ仏法を論じ 同
今日もまた日歩という一日が過ぎ 同
どう着せてみても人形の線 同
死にかわり生きかわり蟬の多さよ 同
夕焼をうつして謡本修羅場 京都府 都倉 求女
脚線美ヘッドライトにちと慌て 同
事情どうあろうと景気いい槌の音 同
北野綾麿止 同
センチより地元はバス代に反対し 同
真剣な顔のダシスの日本人 大阪市 山田 蛙水
動かない亀の甲らの乾き切り 同
虫干しの着られる柄は出して置き 同

見ろ聞け 言え

内海 敬太



ヨット会談僕はヨットでデー
トする 鶴丸

川維米子支部機関誌松露七九号
でこの句を見た時、僕は急いで書
棚より川維四〇九号をひっぱり出
して、近作柳樽のページをめくっ
た。そこには次の二句がある。

農基法どうなろうとも種を
蒔き みのる

国会は国会俺は炭を焼く 旭峯

一句目の農基法は、「農民首切
り法」とも言われ革新陣営の猛烈
な反対にあったが、自民党によっ
て強行された。二句目は一般に、
近頃よく紛糾する国会を諷んだ句
であるが、これらの句は「社会、
政治の苦痛から免れ「天刻にな
り」「世を茶化している」句で、
作者等もそうして社会に対する悲
しさを、まぎらわしているのだと
思う。でもその考え方は「政治は
汚ないもの」「等々の封建時代の抑
圧されていた人民のものであり、
政治や社会は、自分達でよくする
のだ」と言う民主的な考えの上に立
つては、全くつまらないものにな
るのである。

人民の権利を放棄してはだめで



キッスした口を歯医者へアーンとあげ	竹原市	杉原 愛鳩	女房は泳がずアサリだけ拾い	同
やせぎすの斗志ますますやせて	同	同	トランプをやりに来たのか海の家	同
善人にされて否定をせぬ弱さ	同	同	赤ん坊くまうまそうにウニを嘗め	小川静観堂
インスタント火葬お骨のあたたく	日原市	千石 快人	棚経の小僧へ扇風機かけてやり	同
無銭旅行体元手と云う若さ	同	同	棚経と高校野球がカチ合うて	同
見栄で聞くクラシックの退屈さ	同	同	課長より上座は寄附がさしてくれ	河本南牛史
税金の話はぬきで飲む座敷	大塚市	藤富 淀月	夏羽織着て仲人かと聞かれ	同
秋風も市井とちがう釜ヶ崎	同	同	帰省して心づくしの団扇風	同
また女かえてナイトー指定席	同	同	単位取らず学生割引のみ利用	波多野 美田起
押入れを出ぬ強情に母が負け	竹原市	大洲太八洲	時間外の方が多忙なおえら方	同
故郷を棄てて闇借りの意地を張り	同	同	夢にみた扇書印刷するよき日	同
全盛の面影もなく耐に酔い	同	同	飛行機は飛んでゆくものと云う暮し	松島 光一
仰山なあせも程には仕事せず	高知市	須藤 俊江	鼻の蠅追う手間惜しむ内職の	同
レジャーブーム便所の掃除忘れ	同	同	ステレオですと近所へも響かせる	同
リバイバルブーム初恋思い出し	同	同	女房の愚痴が胃腸によろこたえ	鈴木村 瀧子
台どころ明日に伸ばせぬ妻の音	大塚市	木村 草々	女房の恥というのを着て廻り	同
働く人の歯ざしりきつし簡易宿	同	同	金積んで出来ぬことあり愉快なり	同
御先祖にその日ぐらしを見つめ	同	同	面会が去んで土産のおすそわけ	沢田美恵子
親馬鹿が三人寄ってようしやべり	竹原市	山内 静水	割引で買って喫茶で足が出る	同
歯を磨く片手植木の水もやり	同	同	二割引財布の紐をチトゆるめ	同
幸福へ創価学会うるさすぎ	同	同	札束の重さに馴染みえぬ掌です	吉田 俊和
オヤジがオフクロがと息子偉そうに	笠岡市	松本 忠三	発展はオートバイだけ増えた街	同

ある。文学は社会から離れて、その価値が存在するはずは決してなく、あくまでも社会と共になければいけないのである。

なのに社会を放ってしまったような句を吐かれるとは、私、慚愧に耐えません。今の社会は、金持ちの味方自民党と、金と虚栄を夢見ている労働貴族によって牛耳られてる社会党、それにチッココチヨイ西尾末広の民社党で自分達の都合のよいように政治しているのです。

こんな社会を「国会は国会……」などと放っておいてよいのでしょうか。

人民はもっと現在をみつめ、公僕を監視せねばなりません。作家は「思想のある句」即ち社会に対する自分の考え方、人生に対する自分の考え方を詠まねばなりません。それが社会性のある句だと僕は考えます。

肉休川柳よく、ロマン川柳よしですが、それが社会と遊離してしまっている十七音字では、それは

本

福寿司

心斎橋筋大丸前

電話の三三四番



マツチにはおしい凶柄と思えども

同

政府もう今年の豊作保証する

鳥取市

近藤 昭夫

早々と暑中見舞をくれて病み

同

恋の句も酒の句も詠みベッドに居

同

無軌道さ墮ろしたことさえ口に

東京都

奥津啓一朗

男に手あずけ心にすむ悪魔

同

甘党の付合いたかがアミダ籤

鳥取県

亀崎 漫歩

町長選挙戦

一票が祝当選に酔いつぶれ

同

平蜘蛛の姿勢よろしく社につとめ

宮崎市

野口卯之助

百姓の雨をよろこびあって飲み

同

此処だねと盲判なれている

津市

嶋野ひろし

保険屋と邪教根よく攻めて来る

同

愛情が足らず手から砂がもり

岡山県

鳥取 周市

サングラス押売と云う顔にかけ

同

眼疾悪化して二ヵ月後 一句

ぼんやりと見えるわが手がな

大阪府

山田 迷朗

家計簿の赤字の上にこがね虫

同

お鮎子の絵柄をだしに追加酒

市松市

坂上山椒坊

離婚した夫の酒乱をまだ案じ

同

一日がさあ始まった満員車

八尾市

片山 光福

ゼントルマン仮面を脱いだ満員車

同

ホームバー伯父二次会へ伴行

滋賀県

土守 蜻蛉

杯で呑む青汗へ目をつぶり

同

おねだりに来ても嬉しい娘を迎え

児島市

伊丹柳瓢子

夕焼をフオークダンスの顔に受け

同

内職の強みおむつも替えさせる

大阪府

西本 保夫

切手など集めて彼女未だ出来ず

同

浮気などする気はないが顔の皺

宇部市

神田 豊年

セーラー服浴衣を着れば腰の線

同

来て見ればさても河鹿が寝つか

大阪府

萬代句念坊

盃を片手ぜいたく子にさとし

同

何県か 蠅や車窓を慰める

京都市

大久保 和子

お隣の松から植木屋会釈する

同

海の青狐独がひとり漕いで出る

香川県

三井 酔夢

日給が酒に化けてもビールは建ち

同

炎天の希望学生アルバイト

玉野市

小谷 仙山

顔貸せと世間に暇な人も居り

同

淋しさは群衆の中の唯一人

八尾市

吉田 博一

タダ貰う風船の色にもすぎずき

同

もう駄目と云うやりくりを支え

須崎市

高橋 蟠蛇

出棺の日の放鳥は舞い戻り

同

見合などいたしませんと山へ行き

兵庫縣

遠山 可住

プロレスを見ている足で蚊がふく

高知県

山川 勝子

後添いが欲しいが子供は反抗期

同

どの顔もビエロに見えて鉄工所

四国巡拝

河本南牛史

川柳でもなければ文学でも芸術でもありません。社会をあきらめて生きるのも一つの思想と言う人もいますが、それは正しくないものだと歴史も証明していますし、利己主義に陥ることは眼に見えて明らかです。そしてそれは文学へのほうとくです。

お四国さん四国八十八カ所巡拝は弘法大師のお教えの道であり、大師は有名な能筆家であることは衆知のことです。趣味の川柳と共に、大師にあやかり、四国行脚に出かけることに致します。皆様も同行に加わって下さい。今回は番外(本番は五十一番石手寺二Kの西方)伊予の国道後温泉鷺の谷、国際観光旅館、川吉別荘泊中の本尊様生路郎並に蔑乃如来様へ詣する、中原光雄氏と共に多大の御利益を得ました。

四K南方に住んで道後温泉にはちよいちよい来ながらも知らなかった。国際文化観光旅館の美は昔の鷺の谷の面影はどこへやら、お向いの寿苑は利とか大臣の御宿泊中とか川吉別荘は宮殿下御手植松とかも有る庭園は雨煙る七月四日の夕訪れ、取次嬢も夏とは言え和服姿も古典めき路郎先生御自身に玄園まで出迎を受け、恐縮やら、有難いやら、信仰の道なら拍手最敬礼、仏道では南無大師遍照と唱



出不精をテレビのせいと誤魔化さる芦屋市
 台所独占される離乳食
 愛情に包まれテープ海に浮き愛媛県
 金槌が浅瀬で派手な水しぶき
 池田首相とかく夫人の後になりホノルル
 フルシチョフ君マツチあそびはあなないよ
 病人がメロン切るのを指図する芦屋市
 附添がメロンに飽いたなど申す
 貫い泣き眼鏡上げ上げ涙ふく神戸市
 面会へ子供は俗をやると云う
 俺に代った奴の人氣をきいて病み仙台市
 ビール冷えてまきとお風呂を妻勧めめ
 中風の掌で叩かれて死ぬ蠅もあり大阪市
 生ワクチンのまして妻のはし和泉市
 ダウ高値血圧までも高くなり
 名人かしらねど食えぬ職に生き兵庫県
 入学日先生の名だけ覚えて来姫路市
 がつちりと恩給取って課長の座岡山県
 冗談も云わず四角に世を渡り愛媛県
 男氣を出したばかりに身が亡び玉島市
 商人の打水今日を売る構え松山市
 何事もよい方を見る目に育て西宮市
 尾を振って媚びる奴だけ目にと堺市

三上 美路
 同
 藤原 君子
 同
 並木東田楼
 同
 里田一十
 同
 岩井千恵子
 同
 平野 光道
 同
 花月亭 九里丸
 末田 晃康
 岩道 博
 常岡 孝風
 隠岐 不酔
 久戸瀬春光
 村上 竹生
 井上 旭峯
 沖原 光雄
 鶴飼 鮎子
 武田軍治郎

踏んで来たいばらの道を子に踏河内長野市
 敬老会俸せそうな顔ばかり七尾市
 意気こんだ自炊が食堂へもう変り笠岡市
 大根が居るから主役なお光り貝塚市
 目で味を見よと料理の豪華本大和郡山田市
 百姓のレジャー家中昼寝をし兵庫県
 姑の能面に若妻如才なく富田林市
 同権はハンドル手綱をも握り茨木市
 聞き合せ高塚だけを見て戻り神戸市
 むし暑さ敷帳はボーズのコンク松江市
 ガム噛んで派手三振へ湧く拍手松坂市
 面白い嘘面白く聞いてやり大阪府
 親に詫び先祖に謝して墓掃除羽咋市
 勉強中とは名ばかりの札をかけ松江市
 函館にて

森本黒天子
 松高 秀峰
 谷本鈍愚坊
 護川 梢月
 松本 峰水
 齊藤たけお
 浅川 八郎
 高木繁太郎
 吉田 隆史
 岡崎 洋月
 羽根伸太郎
 井上美恵子
 三宅 ろ亭
 岡崎 雪美
 木村 涼人
 川口 弘村
 持田二三子
 行吉 輝次
 樋口 一峯
 指吸 拳児
 宮政 周防
 高浦 茶染

え奉りたい気持で御居間に通され
 て三時間余も御教授を得た。俵は
 趣味川柳の有難さの外なりませ
 ん。腹乃先生よりは、たえずおみ
 き(酒)をふれまいてもらいな
 がら、ベテランなくして上達栄進
 とほしいと路郎先生の御言葉通
 り川柳専門家と言えは肝生路郎先生
 が日本中に唯一人の職業人であ
 る。言い変えればベテランであ
 る。大工にしても佐官鉄工團基
 棋にしても、ベテランはずば抜
 けた専門は専門の仕事を感じ得る。
 川柳家はベテランとしてなしと
 げ得る一人だと自信満々の御言葉
 がうれしかった。

それぞれ本尊様には特色を持
 っ居られる。例えば、文球菩薩様
 は、知恵、文法の手引をして下さ
 り、子安大師様は、子供をすこ
 やかに育て下さる如く、川柳道に
 も色々解釈も有ります中に、川柳
 雑誌の有難さ、川柳を広告として
 の利用価値は、観光地に商品に現
 われつつあり、作者、南牛史も、
 夏姿サロンプラスまで透いて
 見え

でサロンプラス発売社よりは御札を
 頂いて居る。お互い川柳作家頑
 ろう。

川柳雑誌社特製

書きよい 美しい

投句用 柳 箋

一冊(五〇枚綴)三〇円
送料(一冊分)二〇円

ていた。

晩三吉

中国山脈のまんなかに備後十日市という古い町がある。どんよりと雪もやいに空は曇っていた。食後、いかに土地っ娘らしい頬つべたの真赤な女中さんが、子供の頃からいはいある青黄いろい果物を持ってきて大きな包丁で器用にむいてくれる、それ何と聞くと梨ですという、今頃に梨と不思議な顔をする、晩三吉といって冬でも保存がきくんだという、口に入れてみると水気がたっぷりあって、なかなかうまい。ひとりでは食べきれない、君もどうかと言うと、ケラケラ笑いながら廊下を馳けて行ってしまった。

黒部西瓜

夏も終ろうとする頃、信濃へ二三日の山行を思い立った。北アルプスも北のはずれ、白馬岳から不婦（ケイラズ）の峠を経て黒部川の支流である祖母谷へ。淡い硫黄の匂いがして、河原の野天風呂の湯煙りが、その夜の私を持ってなしてくれた。翌日は鐘釣温泉から宇奈月へ。帰りの汽車はまだ陽も高かった、むやみと喉がかわく。N駅で10分ほど停車すると同行のY君が何を見たのか駅前へ飛び出して行った、やがてニコニコしながら大きな西瓜を抱えて戻ってきた、黒部西瓜といって他のものが

終りになる頃に出てくる、ラグビーのボールのように細長く縦縞のはいったあれである。登山ナイフを出してザックリと二つに割ったその時の味は忘れられない。

マスカット

姫路の町からバスで暫く、山のなかにひっそりとS温泉がある、冷泉に近いので加熱しないとはいれない。その頃は農閑期に近在の人達はいりくる程度なのどかさであった。

月の大きな美しい夜の浴後をひとり庭に出てみると、一隅に温室らしいものが見える、ガラスが一枚破れていて、のぞくとブドウの房がゆたかに下っている。そっと差し入れた掌に一房が載った、真つさおに透き通った大粒の円さが口にくくむとコリッと歯ごたえのある甘さだ、月の雫のように。

当時には、まだ珍しかったそれがマスクットだとは後で知った。

デリッシュ

一機、二機とB29の来訪で、ツロツロ警戒警報が出されかけて、店頭には果物の姿がすっかり姿を消していった頃である。

東京の帰途、青森へ回ってリンゴを仕入れて帰ろうと思っていた。夜明けに浅虫温泉へ着いて、そこから本場の弘前へ照会して貰った。傷んだリンゴなど馬も食べ

ないと言われていた土地柄である。お茶代りに出されたリンゴの味は嬉しかった。2貫目以上は御法度という時世である、翌日の列車を打ち合せておいて窓から積み込んで貰った、リュックに一杯の真っ赤な紅玉、それとは別に素晴らしい香りの両手に余る竹かごにギョッとした黄金色はゴールデン・デリッシュ。ふくいくとした香りと舌にけこむ甘さ。一個二個と室ものように親しい人に貰ってもらった。今ではデリッシュなど珍らしくもなく出回っているが、その時の香りと味には程遠い。

かごと大事に洋服ダンスに入れておいたが、毎日開けるたびに得も言えぬ匂いがして一ヶ月余りその香りは消えなかった。

桜んぼ

山形のまちは霧雨が降っていた。どの家の店先にも黄と赤の鮮やかな色があふれている、親指と人さしゆびとで円を作ったほどの美事な桜んぼである。一個でも皮にきずがつくと忽ち傷みが拡がってしまふので遠くへ送ることは殆んどできないという。音もなく降る雨の宿で、ひとり口にする桜んぼの味は甘ま酸っぱい旅愁の味、感傷に包まれた孤独の味そのものであった。

夏みかん

山陰地方を回った帰りの汽車を中国勝山で捨ててバスで小一時間、ここ湯原温泉は野天風呂とさしよ魚で知られている、夏の陽射もさすがに涼しい。

宿に着くと十四五貫のポリウムをはこる女中さんが愛嬌よく迎えてくれた。夕食の後でふと途中で貰った夏みかんを思い出して、食べないかと差し出すと、じゃ後でお砂糖を持てきますからと、いそいそ退っていった。

河原の湯へはいり行って、いい気持ちでそのまごろりと寝込んで了った。ふと眼がさめるとお客さんと枕元にさっきの女中さんが笑っている、おかみさんが起きるとお砂糖が出されなかったと、小鉢に白砂糖をいっぱい盛って、イッとし出した。

もう十二時とはうに過ぎたらしい、河鹿の声がしきりと瀬音にのってくる。

旅で同宿した女



西 いわを

時 大正十年 場所 勝浦浦島温泉 人物 未亡人と子供

おぼろげな記憶になっているが未だ女心を解さない頃の旅先であった。

アメリカ帰りの若い未亡人で一人の子供を連れて郷里へ帰る途すがらであった。同じ船に乗合せたのも一層親密さを加えたものと思うが、其の頃の私は純情な青年でもあったのである。アメリカでの生活をタンと云う程聞かされた事は云う迄もない。青年の脳裡にも未来への空想を画きつくしていた。船からは下船したが、其の頃か偶々降った地が温泉場であった為か、同じ旅宿に一泊とはあい成った。

今も其の当時と変らぬ洞窟の中の温泉で太平洋を湯の中から眺められ日の出を拝んだ事を記憶している。

何事もなかった一泊の朝湯をしみじみ味わい乍ら、悪魔にでもつかれたように考える。漱石の三四郎にある「あなたは余ッ程度胸のない方ですネ」とは云わなかったような気もするが、それに似たような言葉も聞いたようである。其の瞬間ボーッと目頭が熱したのを覚えている。写真も幾枚かを貰った記憶がよみがえっているが、今は面影すらも残っていない。

若い未亡人と旅先きの宿で一しよだったあの日と思うと、ちょっと心残りのすることがある。



久良伎先生 の生涯

奥津啓一朗

先生はその川柳への成長を語つて、然るに明治十七年の春、先輩

だのである。帰京してから「困々珍聞」「吾友新誌」「顕才新誌」の投書家と成り、「困々」へ

頭に蜻蛉秋津州を代表し

竹内子爵に随行して九州地方を漫遊し、鹿児島では島津久光公に謁し、婦途伊賀の名張で子爵の舎弟

藤堂男爵家へ一ヶ月滞在している間、退屈過ぎに五世川柳編の「絵

本柳多留」を読んで深く子供心を満足させた。尤其川柳は多く狂句

であつて、「乳母同志対決になる柿一つ」「毎夜出て人を擲んで喰

う按摩」「道具方岩をちぎって鼻をかみ」などのクスグリではあつ

たが、兎も角も川柳の面白味を覚えた。尤もそれ迄に平田篤胤の講

本に川柳が往々引用され「つれま

すかなどと文王側へ寄り」又は「ちつとずつ出る太股に蹴つまず

き」「十五点などと宗匠ふりかへり」等の句は覚えていたが、更に

一歩進めて川柳狂句へ足を踏込んだ

迎重石丸の門に学び、平田篤胤の講本によつて川柳の妙味あることを知り、やや長じて明治十六年頃、「困々珍聞」の九世川柳選の狂句（前嶋和橋が九世川柳を嗣いだのは明治二十六年であるから、これは久良伎先生自身の記憶違いか、或いは年譜制作者の誤りであろう、しかも九世川柳は「困々珍聞」に狂句の選者としてあつたこととはない）に応募、これを実作の手始めとして川柳に傾倒するところあり、明治二十五年「日本新聞」に時事川柳を寄稿（「日本新聞」の創刊は明治二十二年二月二十一日、即ち憲法発布の當日であつて、ここにもまた誤りが見られる）その縁をもつて後、同社に入社したとして居り、（おそらく「久良伎全集」あたりの年譜によつたものかと思われるが、今私の手許にその書はない）また新川柳

勃興の事情を明らかにした当時の「日本新聞」主筆古嶋一雄の「一老政治家の回想」もこのことを裏書するかのようになつて、その後に自ら川柳の師匠と称する坂井久良伎という江戸川柳の流れを汲んだのは俺一人だというのが出て来たので、これを頼んだ」と、先生の日本新聞入社に就て語り、先生の既に早くより川柳に志すところのあつたかの如くしている。

しかし私には、どうもこれらの記事に信がおけなかつた。というのは、由來年譜或いは略伝なるものは、その人の（事業に於ける）成長を体系付けようとして、無理にも些事をそこに結んでこれを意味あるものの如く受取らせようとする傾きがある。

又更に語をついで先生が明治三十年（或いは二十九年秋）「日本新聞」入社に際し「川柳の師匠」という触れ込みをもつて乗り込んで来たとする古嶋一雄翁の記憶の記述がまたこれを裏書しているので、ここでは最早それを問題とせぬが、なお明治三十五年以前に於いて、先生に川柳に對し我が事としての関心があつたかどうか疑わしむる事実がここに一つある。

それはその東京の金澤堂より発行の「文芸界」に中根香亭が「前句源流」なる一文を発表、川柳及び雑俳の歴史を明らかにしながらも「かかる遊戯三昧の小文芸は、後米終に再発の期なかるべし、將たまた敢て其の發生を希はざるなり」と結んで、その当代に用なきを論じているのに對し、先生に何等の言葉も行われていないことである。もし先生に早く川柳復興の志ありとすれば、この香亭の一文は、そのまま黙過しがたきものであつた筈である。にもかかわらず、しかも正義派を以て任じ、我れを遮るものあればいささかもこれを許すところなかつた先生に、それが見られなかつたということ、川柳に對する先生の関心をそこに考ふるより他はない。として先生が選者として確實に起つたのは「日本新聞」から「電報新聞」

スマートで
着心地良い

GOLDEN
O.S.K.の
紳士服

各地特約店に有り

に転じて後、同紙に柳壇が設けられてからである。と今私にはいずれが真か確たる資料もないので併せ載せておく。

續・川柳料理暦 (五)



水谷竹莊

おでんの季節

上かんやへい／＼／＼とき
からわす

この句は大阪千日前の法善寺にある西田当百氏の句碑である。秋も深くなつて来ると、そろそろ、おでんの恋しい季節になる。酒の肴または茶飯の菜にもなる。東京方面では、おでんだが、関西では関東煮といっている。又、上かんやともいうが、所によって、名もまちまちである。百田もあれば、カブリツキで、鍋をのぞきこんで好きなものを註文して四方山話に興じながら、ゆっくり飲めるし、たべられる。さてそのたべ方である、まず、始めの註文の仕方が肝心であるのである、何を第一に註文するか、これで「通か」通でないかがわかる。このコツは大根をたべてみることである。豆腐や大根にはそれ自体に味がないから、汁の味がすぐに見分けられるのである。これはちよつと辛すぎないかねなんていつてごらん、間違いない「通」として扱われる。その次に「通」として知っていなけ

ればならないのは魚ものたべ方である。

たとえば、ちくわ、棒天、ころ、ねぎま、たこ等々、こういったものは絶対煮過ぎたものは食べちゃいけない。グンと味がにおちる。殊に、ちくわの黒くなつたのなんかたべるのは素人であるが、逆に豆腐とかコンニャクなんてのは煮しまつている程、味がいいから、このことも覚えておかないといけない。

たべ方には別に秘訣はないが、まあ辛子をつけてたべるのが普通、魚ものには、コシヨウをふりかける。これは魚のくさみを消す意味からで、通としておぼえておくこと、それから絶対熱いうちにたべることである。冷えたおでんなんて、それを三文の値打もないからである。

食い足りたこの伴せをたしかめる
山彦
縄のれん仕事の憂さも飲み干して
貞夫
縄のれん明日の嫁ぎへ小さく酔い
静園
常連へ変らぬ味を持ちつつ

焼きとり

精力増進のにせもの

屋台店なじみの犬も来て坐り
半歩
困ったことに盛り場の好き

白柳

盛り場に行くとき、その途中でも屋台店が並んでいるものである。おでん、焼とり、支那そばなど、色とりどりのちようちんがぶらさがっている。秋の夜長も飲み歩き、たべ歩くのも楽しいものである。その中でも、にせものの「やきとり」があるから面白い。豚の臓物焼である。一串十円だから五十円もあればたくさんで、それでチエウの一杯もひつかければ、けっこういい気持ちにもなれる。それにいくら「とり」の肉でないにせものだからだといって決してけいべつすることはない。第二臓物といつても、肝臓、心臓、胃、子宮、それに耳、口、舌、などとその種類は多いし、味もそれぞれに特徴がある。これらの臓物は毎日、屠殺場から一手に臓物ばかり引受けている「臓物屋」といわれる店から、やきとり屋へ品物を納めているのである。これを買った、やきとり屋が、色々の部分によりわけて、客が喜ぶように切つて串にさしてつくる。

栄養充分のけもの
立ち飲みの暖簾が招く午後

牧人

六時 よしを

立呑みへいま職安で貰うた金 幸男

串カツの立食い生徒に知れわたり 暖子

おでんの灯つい誘われる場所 弦月

おでん屋に馬鹿にならない借りが出来 薫風子

しかし臓物ばかり食べていたのでは面白くない。そこでいわるけてものを註文するのである。げてもものといえは、子宮、耳、ベニス、肛門など、これがまたすばらしくうまいのである。しかも栄養充分、精力増進疑いなしである。精力がつくというので、色街の女など好んでたべに行く。若返つて大いに精力をつけたいなら、げてものをたべたらよい。

(つづく)

現代柳人録

(一) 姓名 (二) 雅号 (三) 別号

(四) 現住所 (五) 生年月日 (六) 出生地 (七) 職業 (八) 電話 (九) 自信の句一句 (一〇) 川柳以外の趣味 (一一) 配偶者の有無 (一二) 川柳に手を染めた年月

(87) 平賀紅寿

(一) 平賀胤次 (二) 紅寿 (三) 白牙洞 (四) 京都市行京区童安寺

齊の宮 (五) 明治29年12月20日

(六) 東京都中央区京橋三の十一
(七) 象牙彫刻家 (八) (九)
ありません (一〇) 現在はありま
せん (一一) 有 (一二) 大正八年
頃

(88) 梶原一善

(一) 梶原善一 (二) 一善 (三)

(四) 倉敷市水島弥生町四丁目三 (五) 大正3年3月7日

(六) 徳島県麻植郡山川町字奥川田 (七) 工員 (八) (九) 変

骨で通せばわすれなく (一〇) 釣・音楽・洋映画 (一一) 有 (一二) 昭和二十五年五月一日

(89) 辻白溪子

(一) 辻 勇雄 (二) 白溪子 (三)

なし (四) 高槻市西五百住一五九 (五) 大正8年2月16日 (六) 姫

路駅前 (南座の近く) (七) 国鉄天王寺局運転部 (八) (九)

緻の手を持ちかえ夕焼気にして (一〇) スポーツ (但し見物) 切手蒐集 (一一) 有 (一二) 昭和二十四年頃

(90) 魚住満潮

(一) 魚住忠男 (二) 満潮 (三)

(四) 大阪市西成区玉出本通四丁目五 (五) 明治39年10月14日

(六) 大阪市島之内 (七) 機械工員販売 (八) 天下茶屋七四六四

(九) 貴殿かて叩けは埃の出る身体 (一〇) 政治談義あれこれ (一一) 有 (一二) 昭和四年三月

評句 リレー



東京 都
石川 縣
岡山 縣
大 阪 市

山 根 白 星
山 上 千 太 郎
直 原 七 面 山
後 藤 梅 志

今に見る月と戦争するなら

白 星 一 思想 的 に も、地 球 は 二 分

され、止揚を求めるのは難しく、国内の政治に於てもゴタゴタは止まるところなく、個人生活に於てさえ、イザコザが絶えません。

「ちっけな欲じゃないかと青い空」で月世界を征服するのも時間の問題という、今日に、作者の慨嘆がうかがえます。

千太郎「遠くながめてこそ月には夢と詩がある、手が届きそうになると食婪が顔を出す人間界を揶揄して余りある。作者の慨嘆に共鳴します。

七面山「力作なんでしょうが感心して上げられないのが心淋しい。句主の素暗らしい見付けの語い「戦争」がこの句の致命傷になっているとは全く皮肉と云う外ありません。まさか月に生物がいるなどとは思ってはいらっしゃらな

いのでしょうか。白星氏のように政治がどうの戦争がどうのと力んでみるより、ここでは一番、

「今に見る月にキャバレーも出来るだろ」ぐらいに、軽く可笑しく逃げておくのがこの句を生かす利口な術かも知れません。

梅志「晧光さんは熱心に川柳塔への出句をつづけ好感のもてる未知の作家であったが、この句には当惑した。しかし七面山氏の云うような現実面からのみこの句をみるのは酷で、作者は闘争好きな人間即ち人類を諷刺したつもりだったのだから。そのどこのつまりを月の世界へもっていった。一つの譬喩であり、諧謔であろうが、これは少し飛躍が過ぎた形である。まだまだ、吾々にとって月はあくまで丸く美しい。

がえても路郎師の「生命ある句」には程遠いようです。七面山氏のように月にキャバレーを造ったのでは益々ことところざしと違って参ります。夢と詩のある「月」が、「吾々にとってあくまで丸く美しい月」が空想のヴェールを脱いで、

「ドルだけで買えぬと知った月の裏」月光の裏、恐ろしい名付け親「月光へ二の矢三の矢の背き」人類の身近になりつつある現実を凝視して今日的な肺腑を抉る句は出来ないものか。

千太郎「先に申しましたことの補足になりますが、人間は所詮神でも仏でもない、人間の息のかかるところ、猜疑、我執から争いが絶えない、作者はその慷慨を川柳の表現に求めた、今日ぐんと身近かになったとは云え、月はまだまだ丸く美しいが故にこの月を対象にして、効果を得ようと試みたと

のと思われまふ。この句たしかに飛躍し過ぎた感がありますが多角性の川柳の一つの持味としてこの手法も許されてよいのではないでしようか。

七面山「戦争を征服と云う言葉におき代えてみればこの句は判らぬでもない。或は句主はそう云った考えをもって句を作り始めたのが、いつのまにやらつい白髪三千丈式になってしまったのかも知れませんね。句主の現代の人間性（わびとかさびを忘れ切つて、もののあわれを解しない余りにも現実的な科学万能主義的な）に対する無情感の現われとしてこの句を頂くことにしたらいかげんしょう。

梅志「川柳の如何なるヒモもエモアも、現実を離れ去つては意味が無い。また科学の進歩を戦争に結びつけたがるのは、現代病の一つである。こうした点から見てもこの句には全く共感の余地が無い。

○ 斗争の深夜レールがよく光り

白 星 一 感 覚 的 な 句 で す。ボクは

久米雄雄
斯様な句に元来弱いので、すぐ感心させられますが、

「生きよとも死ぬともレール言わぬなり」が、全然場合は違いま

肝疾患・疲労・二日酔

★総合強肝剤



リポクール (12種の成分を配合)

20錠・50錠・100錠

すが、脳裡に残っていて、個人的にも若干の減点をせざるを得ません。

千太郎「公共のものだけに国鉄などの争議は少しの行き過ぎにも批判の風当りは強い、労組の圧力にこの句は強い反省を求めている。欲を言えば「よく、光る」の座語を修辭してほしい。

七面山「レールが光ってそれからどうしたのだから。読者はその先きが知りたいのだが句主はこの句の中にその「鍵」を与えていない。それはともかくとして、もし国鉄職員の肩書がついていないとしたら句としては失敗であろう。この句が句主の佳作とも思えないの

だが「感じの句」ではあろう。独り作って独り楽しむのならこれでも良いが、他人に見せる句としたら今一步深く推考の余地はなかったかと惜しまれる。

梅志―鉄道の争議で、列車を止めた立往生させたりすることに内部からも批判がある。作者は国鉄職員で且つ功労者であるから責任感に終始したい側だろう。レールに対する愛着を持たぬ筈はない。そこでこの句は、斗争に疲れた深夜、ふとみる縁の下の方持ちのレールに、いつもより輝やきを覚えたという、極めて良心的な作品で、これも一つの詩感であり、自然な句である。そこには作者の反省もあろうし、焦慮もあってよい。私は真実味に富んだ作品だと思いが!! 「よく光り」はそれ以上にかえようがない。レールが光ってそれから先どうした。という言い分はすこし無茶です。小説でも仲々先きのわからないのがある。

白星―「よく光り」の座五がややイージーに作られている感なきにしも非ずだが、

―斗争の深夜レールの光り過ぎ―にした処で大同小異か。飛びきりの佳句とは勿論思わないが、評は千太郎氏梅志氏に尽きる。

千太郎―レールに列車が走ってこそ妥当であります。深夜とはい

え又一時であらうと、いたずらにただレールが光っているとしたらこれは異状のもです。その責任の労働争議に反省を求めたいのは一般の良識でありましょう、この句肩書が無くとも理解出来ます。「よく光り」には使命を果していない、無駄に光っているという意味がふくまれていないでしょう。

十面山―この句が七面山の作としたら各評者は勿論のこと読者諸賢は一体この句についてどう考えられどう感じられるであろうか。恐らく、梅志氏、千太郎氏のような名句評は生れて来ないのではなからうか。私の云いたいのは「句」が「句主の職業」を背景にして取り扱われたり、論ぜられたり、評されたりするのは文学的な面から見て面白くないと云うことが云いたいのです。句が作者を離れて「句としての独立した人格を持つ」ところに「句のいのち」を、文学的な価値を僕は見出したのです。例えば「俺に似よ!」の句にしても、この句は職業川柳人としての路郎先生が作ったから名句なのではなくして、句自体がいのちある句であり、名句なのではないでしようか。よく光りをどう読み返してみてもどうもそこにはなにか一つとしてガッンと来るものもなければジーン、ピンと

ひびいて来るものもない。
梅志―句評というものは少し高所に立ってみたいものだ。駄々をこねる七面山氏のお相手をしてはキリがない。(つづく)

★ しんとろり

今西生 董

五代目松鶴氏の「しんとろり」……油壺云々のしんとろりを略し、しんとろりとして、

しんとろり酒も女も大阪やと作句して知人に見せた処一寸面白いと云われたので、川柳まつりの兼題大阪(土井文豊氏選)に投句したが没だった。私は同じ句を他に投句することはめったにしないが先の友人が大阪生れでなかったで近畿以外の人はこの「しんとろり」をどうとるかと思つて、岡山の七面山氏の処へ投句、選にはぬけたが、

酒とろりとろり女も大阪やとなつてた。結果選者にはこの単語がわからなかったのではないかと云う疑問が出て来た。私は独断でこのしんを真実の真と考えていたが、ために明解古語辞典を引いて見たが出てこない。大阪弁入門の中に引用されていたのでどうしても真意を知りたく著者大阪

学芸大学の前田勇先生に御教示をこうた処、御丁寧な御回答に接した。

前略……五代目松鶴が坪内氏の言葉として挙げた「しんとろり……油壺云々」は恐らく近松門左衛門の鍵の権三重帷子下巻の冒頭にある歌謡「やりの権三は伊達者でござる。油壺から出すよな男、しんとろりと見とれる男」に拠たのでしよう。しんとろりもしんとろりも同義で上半の「しんとろり」「しんとん」は単に音調をととのえるだけで主意は下の「とろり」にあると思われまふ。

近松のしんとろりは油のとろりとなめらかなさまとうとりと見惚れるさまの両義にひっかけて

あるのですが、お説のように「しんとん」に真実の意があるかは疑わしく現代語としては「しんとん」「しんとろり」(上半)はもう死語です……後略

これが先生から戴いた「しんとろり」の全文です。したがって選者にわからなかったのは、当り前です。

然し七面山氏の酒とろりとろりでは、路郎先生の名句がありますので、句の良し悪しは別として「真とろり酒も女も大阪屋」と改作しました。私は今自分の句を云々しているではありません。このような言葉をただ語感に魅せられて使用するとんだ恥を書くこと云いたかったからです。

文化の秋におくる作品展

ご家族づれでお越しください

会場 大阪梅田・阪神百貨店二階丸善画廊

(電話 二七八七番)

会期 10月5日(木)10日(火)まで六日間

自午前十一時―至午後八時

作品 短歌・俳句・詩・川柳作家新揮毫作

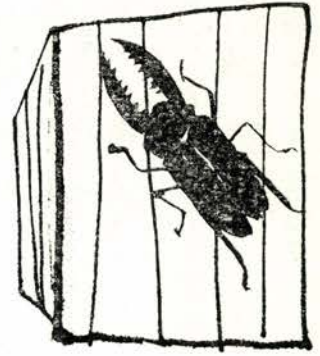
品 (半折・横物・色紙・写冊・陶器其他)

頒価 売約に応じます。会場係に御申出下さい。

主催 関西短詩文学連盟
後援 大阪市教育委員会

・短詩文学作品展・

(第五回)



歐洲

とびある記

(二)

中島生々庵

ロンドン

六月十八日午後六時アムステルダム空港を立つて七時二十分にロンドン空港に着く。噂どおり税関はなかなか大帝国の威厳らしいものをひけらかして居る。それでも「スイスで時計を買ったろう」「何云ってるんだい。スイスはこれから行くんだよ」。こんな工合で割合早く通して呉れた。日本人と見れば時計を尋ねるのは常識になって居ることを日本に帰ってから聞いた。空港からホテル迄の遠いこと。一時間余もかかる。ホテルに着いたら、ご存じゼニ勘定の勉強が大変である。この国では十進法でなく十二パンスが一シリリング、二十シリリングが一ポンドと云う工合。

税関で勅進帳のいくさり
ロンドンで二一天作まにあ
わず

六月十九日朝九時半ホテル出発。お上りさんのロンドン見物は型にはまって居るらしく、テイト美術館、ナショナル美術館、ロンドン塔からテームス河、議事堂、それから十一時三十分バックingham宮殿の衛兵交代に間に合わせ。ロンドン塔は九百年前建てたウィリアムス皇帝時代の威厳が今日でも昔をしのぶ様に、兵営と博物館として残って居る。当時の血なまぐさがあちこちからしのび寄って来る思い。丘上には三平方米位の断頭場が残されてありそのすぐ近くに、ドイツから第一次大戦の時逃げ込んだヘスを幽閉して居た小さい二階建をガイドはやや嘲笑的に説明して呉れる。博物館の方には、あの有名な黄金とダイヤモンドに輝く、即位用の王冠が収めて居る。すぐ下を流れるテームズ河は歐洲の三美川と称せられるだけあって、船舶や周囲の動きの中に

も静かに優美を失わぬ風景は、ロンドン橋を中心に何か心うたれるものがある。河畔には小学校位の子供達が写生をしたり、廃物の砲身にまたがって嬉々として遊んで居るのが印象的であった。

バックingham宮殿前は申し合せた様に各国からの赤ケツト組がギッシリ。四階建の四角な大建築。その宮殿の前の広場には勝利の女神の黄金像が高く大理石の台の上に輝いて居る。「おもちゃの兵隊さん」の行進が見えはじめると、カメラを持った数百のお上りさん達が、騎馬兵に押しやられ、押しやられての混雑さが起って来る。脊の低い日本人がノッポの外人の間をくぐる様に、構内の交代兵行進を8ミリに撮って居るものもある。それにしても、一時間ばかり前に見た美術館での、彫刻なり、絵なり、豪華な壁画なりが、まだはつきり焼きついて居るこの臉の中に、こんな「おもちゃの兵隊さん」の行進が飛び込んで来ると、足もとからフーと浮び上って一二世紀位前の過去に遊んで居る様な気持ちになって来る。テイト美術館でのマイヨール作「三人の女像」がこの群集の中にやって来て、裸のままフォークダンスでもやり始めそうな錯覚さえも起る。この日照りのキツイ広場の真昼間に少々頭が変になったせいかも知れない。かねがねからロンドンの霧はひどいと聞いて居たのに、今日のロンドンは雲一つないカンカン照りである。霧と共にロンドンの名物であった夜の女も、今年の春、道路交通取締法が改正されて町かどから姿を消したと聞いたが、まさか霧だけは法律の力をもつてしても致し方あるまい。旅先きで雨や濃霧に襲われるのは嫌だけれど、名物のスモッグを二寸見たいものだなあと馬鹿な慾が出る。

ロンドン市内の数ある広場の中でもトラファルガル広場にネルソンの像が高く聳えて居るのが、ぐっと脳裡をえぐる。その昔中興時代の西洋史で「英國は各員が義務を尽さん事を期待す」の名指令を出し、トラファルガル岬沖にナポレオンを邀撃し、自らも戦死したネルソンの勇名を、日本海々戦のZ旗と共に、血をわかせた記憶がまさきと浮んで来るのである。

一八〇五年のナポレオンの野望に屈して居たとすると、現在の英國は、ロンドンには、トラファルガル広場はどんな形であるだろうか。古い歐洲の興亡が、力と力、侵略と被侵略の歴史であった事を、今日までの旅の歩きに見せつけられて来たのであるが、これからの旅である仏、伊、エジプト等にも同様なことが云えるものと想像できる。

ロンドンの二階バスも珍らしいが、地下鉄には是非乗って見たいと、二三の友人と誘い合せて探訪気分で夜十時過ぎから出掛ける。話に聞いてはいたが、ものすごく大きなエスカレーターで二段三段と地の底の底まで運ばれたところに、所謂チュウプが四通八達して居るのにはさすがに感心して終った。時間の関係もあつたろうが、ホームで待ち合わせる時間、或はそのまま乗り込んでからも数組の若い男女の抱擁接吻が見られるのも、珍らしい好きのエトランゼーには愉快な風景である。

ロンドン塔忘れてほしい影もあり
さぞ暑いことやろ、おもちゃの兵隊さん
地の底の底のチュウプのラ
グシイーン
ネルソンの期待にトラファ
ルガル応え
ぜに勘定うるさくコカコラ

やめにする
窓々の古きでロンドンの街が暮れ

六月二十日

午前中はブリティッシュ博物館で、ゆつくり見物に費やし、午後にはグリニッチ天文台を訪ねる。現在ここは天文の観測等はしてなくて初代台長フラススチード以来の遺された功績の跡が残されてあるに過ぎない。門の右側に大きな時計が世界の標準時間として、ほらしげにかかって居る。門を入るとすぐ前庭に白い線が引いてある。これが子午線の親元である。この白線を両股にまたいで記念撮影をとる。グリニッチ広場から海軍兵学校の校庭が見下ろされて居る。

午後は自由行動の時間である。かねて連絡しておいた菊地氏がホテルに来てくれて、同氏の案内で見物やら買い物やらを兼ねてジバート歩き。六時からエシブチャックレストランと云う中華料理店の地下室で日本料理をご馳走になる。

米のめしは勿論、味噌汁、エビのてんぷら、ひらめの刺身、それに願望の日本酒にありついた。起死回生の思いでお銚子を三本はどうあける。この時の気持ち私はどう表現していいか。酒は百薬の長と云うが、ワインやラウチュウやウイスキー等とは全く違った味と案

しみを私に与える。日本に帰ってから辞書に探して見たら陶然と云う文字が見つかった。特にその陶然となつて、足どりも軽くホテルに帰りベッドにもぐり込む。八時半である。酒の話と云えば、レストランで昼食の時、家族連れの十五六才の少年がビールをのんで居るのを見た。酒をのむ事は英国全体日本以上にきびしい法令があつて、二十才以下は禁じてあるし、十六才以下には酒や煙草を売ることさえいけないし、大人でも十一時過ぎたら絶対に駄目となかなか窮屈なものなのに、ビールだけは特例だと云うから面白い。

ロンドンの商店街や裏町を歩いて見ると、東京や大阪等に比べて、混雑の中にも何となく、整然と落ちつきがある。勿論北歐の清潔整頓などとは問題にならず、紙屑も落ちて居るし、寒書もちよいちよい目につく。

横文字でそろそろ楽書見えはじめ
世界中の時計の針をふりむかせ
茶目ッ気な 子午線ジョン
と飛び越える
グッブまで 日本の酒の酔いごこち
腹の虫 久々あつ爛とめぐり合い

六月二十一日

六時起床。不用の手荷物を小包便で送る荷造りをする。十時半から、セントジョウズ病院を見学に出かける。昨日この地区の医師会に申入れて紹介して貰った長い歴史を持つ病院で、いろいろ親切に案内して呉れる。産室で生れたばかりの赤ちゃんが、母親のベッドに接近して寝かしてあるのは、我が意を得たと云うもの。母性愛からばかりでなく赤ちゃんの方から云い分としても、これでなくてはいいかんと思う。あわただしくホテルに帰り昼食して二時半空港に向う。五時十五分飛び立つて六十分には花のバリーに着いて居た。ロンドンのホテルから空港までのバスの時間と、バリーまでの空港と空港の間の時間が殆ど同じ位。時間で云えば英仏間の距離は、大阪から京都まで自動車で行くのと同じである。それなのに、ゼニの勘定も、言葉も、人柄も……あなんと目まぐるしい飛行旅行であることをよ。

パリ

六月二十二日

昨夜十時半ベッドに入り六時半に起床。一行団員の相談事をすまして十時半ホテル出発。あまり混雑しない静かな時間のうちに云うので先ずルーブル美術館に行く。セーヌ河岸に、さすがフランス一世が中世紀頃の城を取りこ

わして、優雅な宮殿造営を始めたと云われるだけあって、十七世紀の内乱には相当破壊されたそうなのに、十九世紀はイイ十四世時代に完成、ルイ十五世によって一七五〇年王室所有の美術品を公開する事になったそうである。ガイドの説明を聞けば聞くほど、日本の文化の立ち遅れ、規模の貧弱さが、いらいらして来る。北歐から南下して英仏と歩いて来てしみじみ感ずるし、これからの旅でもその感じを禁じ得ない事だろう。このルーヴル美術館に古今東西の美術品が極めて系統的に陳列されて居るのには建築の壮麗さと共にキモがつぶれる。お上りさんのコースはこれから凱旋門、ノートルダム、モンマルトルへ。凱旋門はかねて絵はがきや、先輩旅行者のスライド等で嫌と云う程なじみのものだ。無名戦士へきれいな花が山と供えられて居る。日本で云えば線香の煙がたえる事なしというところ。ノートルダムはゴシック美術の粋と云われるそうだが、私の様な素人の目にも、正面の美しい大きな窓、高さ六十八米もある鐘楼等が特に印象に残る。それよりもユーゴーの歴史小説で、ノートルダム寺院の僧侶クロードが、美少女エスメラルダへの邪恋。こんな事を思い出して見ると装飾効果や建築構成が何となく陰うつな中世時代の感情に迫って来る様

である。エッフェル塔では折からの小雨。東京タワーと比較したら笑われるだろう。これが百年も前の建造と云うから一層驚く。モンマルトルはパリのの中のパリと云われる盛り場。明治三百年の歴史があつて、画家、彫刻家、音楽家、詩人達の頌歌集の場であつたらしく、高級なキャバレーも多数ならぶ。日本になじみ易い名前の「黒猫」とか「日本の腰かけ」とかはこの辺だったと昔の記憶を式場氏が思い出して呉れる。そして当時のカフェーが、風変わりでは、或は恐ろしい雰囲気を感じたものにしてる様な名前も多かった事もバスの中で教えて呉れる。たとえば「地獄」「空」「虚無」「監獄の居酒屋」等である。昔々ここから有名無名の芸術家達が輩出したそうだが、今日の現在では一つの盛り場に過ぎないと附け加えて呉れる。

ルーヴルで、ミレーだゴッガンだルノアール凱旋門と云う名のここに眠る夢
飛び降り随意金網がないエッフェル塔
ユーゴーの妖気、あれノートルダムの窓

六月二十三日

十時ホテルを出発して、郊外一八キロのバヤサイニ着く。先ず

金バツの鉄門に驚く。歴史上の有名な人達の像がならび、一段高いところにルイ十四世の銅像が立つて居る。とてつもない広庭がきれいに手入れしてある中に豪華な極めた宮殿は南北千メートル。中には皇帝の間、皇后の間、戦争の間、平和の間、鏡の間等があり、美妃アントワネットの悲話が、どこからか、しのびよって来る思いである。近くのレストランで昼食後、一時間余でオーベルのゴッホの墓所に着く。門前の麦畑は豊かに穂って居るが、日照りは殊の外きびしい。この墓所から程近いところにゴッホの最後の下宿であり、臨終の場となった家がある。

現在ささやかなレストランとなつて居るが、その三階の屋根裏のみすばらしい室。粗末な塵まみれのベッドが一つと自画像がボツンと壁にかかつて居る。これがゴッホが自らのちをたつた室である。ベッドにそつとさわつて見た。肉親のたましいにでも触れた様な寂しい、そして温い感じであつた。遠い道をホテルに帰り、夜は渡辺氏に招かれて中法楽園と云う中華料理店で日本食のご馳走になる。マグロの刺身、味噌汁、めし。ロンドン以来の日本の味。暑さも疲れも吹っこんで終う。すぐ近くのモンパルナスに児玉女史の下宿を訪ね少憩後、有名なカフェー、ドームに案内して貰う。夜風に当り乍ら賑やかなモンパルナス

通を眺める。この附近はこんなカフェーが集つて居て、このドームはその中でも一番古く日本人の間に評判のいいところと云う。

ベルサイユ、アントワネットのしのび泣き
高々とルイ十四世は空を指し

なあんだこれを、まねたか
赤坂御所の門
けしの花、墓石に赤し、怪まれる
若いいのち吸つたベッドにふれて見る
日本の香り味噌汁のけむが目にしみる

六月二十四日

今日一日は自由行動の時間。野間と云う青年美術家の案内で、オペラ前から、商店街や百貨店を歩きまわる。歩道には人なみがあふれ、大道商人が「いらっしやい、いらっしやい」このハンカチが三枚で「百元」と云う式で、食べ物や安雑貨、おもちゃを大声で客に呼びかけて居る。こんな安ものを目をやっては日本人の俗骨にかかると一べつしただけで通り過ぎ、マドレーヌ寺院に近い専門店で飛び切り上等の革手袋を妻のため買った。野間さんを通じてフランス語で「あなたの奥さんが喜びますよ」と店のマダムが云う。主人が私にもわかる英語で「あなたの奥さんは大変お幸せですよ」と云う。こ

こからコンコルド広場を出て、ベシチに腰をおろしパリーの裏ばなしやら、国際政情等近きく。ロンドンでも乗つたが、パリーの地下鉄に乗りたくなつてコンコルドから地下鉄に乗る。ロンドンに比べて薄ぎたない車で、普通席と上等席と車輪が違う。上等席はクッションで普通席は板敷である。市民の殆どが普通席の方に乗るそう。で、野間青年は乗客に就いてパリーの人情風俗を面白く説明して呉れる。パリ人だからと云つて人相のいいのばかりは居ない。こちらの話をウサンくさそうに聞き耳たてず、にらんで居る奴も居る。そんな時はにらみ返してやるのがいいそうだ。出入口のドアが半自動式でうっかりすると降りそこねる。お上りさんがここでもまごつく。

夜はガイドが變つてエツフェル塔の二階で豪華なレストランの食事。食事もホテルの食堂より余程上等だがお値段の方も相当高級。奥山ガイド女史の機転で、予め値の方を先きに調べてから一品料理の注文をする。それでも夜のパリを見下ろしながらのワインはうまかった。食事をすまし涼み場の方に出ると西の方に月が感傷的に浮かんで居る。今頃は日本時間の昼間では見えないなどと考えるのはこの際禁物である。誰やらが日本はどの方面だろうなあと、月に呼びかけて居る。詩情ではない。

第二室戸台風

風水害被災地の皆様に

謹んで御見舞い申し上げます

大阪市住吉区万代西五ノ二五

川柳雑誌社

麻生路郎

中島生々庵

旅愁と云うものだ。

手袋のサイズへマダムの手を借りる

特売にいづこも同じ女房族ドモアリガト、マダムはお世辞くり返えし

地下鉄の薄気味悪さを、ねめかえし

日本から見えない月を寂しがり

六月二十五日

午前中日記の整理やら洗濯やら寝不足取り戻しのための静養とする。午後は留留氏の知人御夫妻の御厚意で、ドクター、チー、サイドと云う小兒科専門医を訪問。日曜日の家庭訪問は普通なかなか実現出来ないと聞いて居たが、全家族の大歓迎を受ける。こちらから尋ねる事にこまごまと答えて呉れるばかりでなく、先方からもし

ろいろ日本の医者や医療の現状に就いて質問して来る。一時間の約束が二時間半にもなり、記念写真撮って別れて来たが、得るところ非常に多く、快適な半日が嬉しい思いでとなつた。

六月二十六日

今日はパリとお別れの日。六時半起床してトランクの整理やら買物。

二時半空港へ。四時十五分出発チュウリッヒへ。(以下次号)

お詫び―前号「アムステルダム」の項にアンデルセンの人魚の像が出て来るのは、当然コペジハーゲンにある筈なのに、清記を手伝って呉れた人はいそがしたのが原因でとんでもない事になって申訳けありません。訂正して深くお詫び申し上げます。

いろは送り

— 九里丸さんの句から —

富士野鞍馬

寝くたびれいろは送りをくり返す

これは八月号近作柳樽に入選していた、花月亭九里丸さんの句である。この「いろは送り」を使ったところに、芸能人らしきがある。

「いろは送り」というのは、竹田出雲作の浄るり「菅原伝授手習鑑」の寺子屋の段の、松王丸夫婦が、伴小太郎のなきがらを野辺送りするところに使われた文句で、

「いろは書く子をあへなくも、わりぬる命是非もなや、あすの夜たれか添乳せんらむ、憂目見る親心、剣と死出の山けふこえあさき夢見し心地して……」

というのである。

それでこの文句の「あさき夢見し心地」をくり返したという句想である。

古川柳にも、この文句を使った句があり、

もてた晩あさきゆめみし心地なり
和里
というのが、「柳多留」四十六編ののっている。

七」には、鈴ヶ森までの所名が綴られている。また長唄の「京鹿子娘道成寺」には「山尽し」が入れられている。

★ ★

台風余話

その時、霞乃先生
すこしも騒がず……

不二田一三夫

★ ★

1961年9月16日(土)午後一時半からたった二時間、アッという間に、さすがのマンモス都市大大阪も、だらしなく打ちのめされてしまった。

まずボクの家なんか、一発のバシチでグロッキーになるところ、どういう風の吹きまわしか、柳に風とフワリと逃げられたのは、まったく天佑だった。

だいたいボクは守るということ

は苦手で、あの二時間、じつと家の中で倒されるのを待っているような気持ちにはたまらなかった。かつてのB29に爆撃されたときのように逃げるばかりの戦いはどツマライものはない。

米ソが核実験をやりだしたが、あの強烈な破壊力を台風へぶつけて、二つ、あるいは三つぐらいに、たたきつぶせぬものか。せめて二つにでも割ってくれたら人命を救うことができるのに。

二女の友だちの家が府下の野中の一軒家だった。避難命令で安全なところへ逃げたまではよかったが、さて、帰ってみると家がなくなっていた。どっかへ飛んで行ったのだ。ついでに家具一式も、風と共に去りぬ、だった。

悪夢のような第二室戸台風の翌日、路郎先生のお宅へ、お見舞いにあがったところ、両先生ともお

元気でホッとしたが、裏庭のヘイが倒れていた。閉めた雨戸へ畳を立てかけ、この「風台風」と戦い、みごとに追っばらわれたのである。

あの台風の吹きすぎぶ最中、霞乃先生は二階でチビリチビリ飲んでおられたそうである。ボクなど二階のはうが安全とは思いつても、あまで家がゆれては気持ちが悪くて、じつと坐っておれなかったが、度胸満点の霞乃先生は「どこ吹く風」と、ゆうゆう飲んでおられたのにはボクたるものカブトを脱がざるを得なかった。「家が動いているのか、酔いがまわってきたのか、ちよっと判断がつかなかった」には、恐れ入りました。ウチの女房や娘がグッグッあの最中眠っていたが、こんなときは女性のはうが強いのかなあ……

沐天逝く

沐天―石田清次郎氏が去る
七月五日午後二時四十分、穿孔性腹膜炎のため、津守の済生会西成病院で永眠された。
享年五十九才。謹んで悼む。

氏は戸籍謄本によると、明治三十六年一月十一日、堺市南旅籠町八番地に生れたようになっているが、「川柳雑誌」(昭和六年六月一日発行)の続川柳家戸籍調の稿によると、明治三十五年七月十一日となっている。本稿は氏の手記であるから出生の届出が遅れたものと思う。そして

出身地の項では「堺市乳守、

初湯は神戸市で使う」とあるから、生れながらに浮世の風は冷めたかと思わされる。氏は強靱な女性をきら

れ、終生独身生活を送り、一人の血縁もなく、病院の一室で淋しく息をひきとった。そして遺骸は疾患研究資料として阪大で解剖に附された。

氏の訃を知ったのは本社からの句会案内や、「川柳雑誌」の九月号が、転居先不明で返還されたのに不審をいだき調査した結果判明したので

あった。

氏は資性恬淡、常に清貧に甘んじていた。正義心に富み、他人に迷惑をかけることも、かけられることも嫌ら

た。句会にはよく顔を覗かした。往來する交友を求めなかつた。氏が久しぶりに句会へ顔出しをしたのは五月の豆秋追悼の夕べであった。その時、

顔色が悪く病をおして出て来たらしかった。義理堅い性格がこの点にも見られた。氏が川柳に手を染めたのは昭和三年頃らしい。自信の句

男みなモシヤモシヤモシヤと悼みけり

というのがある。今から思えば実に三十有三年間の永い歲月を天涯孤獨の川柳詩人として人生に終止符をうったのである。



清姫

— 附道成寺 —

富士野鞍馬

清姫はやぶれかぶれの元祖なり
(万明元)

安珍という山伏に恋をして
ふられた清姫は蛇になって追
かけるという伝説は、謡曲や
長唄、浄るりにも、色をつけ
て作られ、芝居にも演じられ
ている。

醍醐天皇の頃、奥州白河の
安珍という僧が、毎年、紀州
の熊野権現に参詣するとき、
山伏の姿となって、紀州牟婁
郡の庄司という者の家を宿と
していた。

この庄司に、清姫という一
人娘があり、安珍がたわむれ
に「清姫が成人したら妻とし
て奥州へ連れて行こう」など
といった。清姫はこれをまこと
のことと思ひこんでいた。
清姫十三才の頃、例年のよう
に来た安珍に、妻にしてく

け (拾 四)
山伏の寝こがしにした法もあり
(「」)
安珍はすでに蛇淫を犯すところ
(タル四五)

あとで蛇になるので、「さ
め肌」とか「蛇淫」とか詠ま
れている。

すっこかしたので、父の庄
司は、

悪がたい山伏めだと庄司い
(拾三、タル六)

といったであらう。

狂気のように安珍のあとを
追った清姫を、

怖ろしいものは女の追手なり
(万安元)

船が追っかけてゆく法螺の貝
(拾四、タル一七)

清姫は尻尾のやうに帯が解け
(タル七〇)

清姫が帯にれったくすりこけ
(「」)

二八の喰逃げ日高まで追かけ
(タル一三〇)

川端へ来たとき髪はもうほど
(拾 五)

渡し守髪のとけるを見て逃げ
(タル七〇)

安珍はみかんをくくみくみ
(タル四八)

あんちんははした銭などおっ
(タル三、拾四)

等と詠まれている。

日高川まで来たが、生憎増
水で、舟がなければ渡れない
のであったが、清姫は川へ飛
びこんだ。みるみるうちに大
蛇と化して川を渡った。

日高川越すころ角が二三寸
(タル一六二)

首だけはとくに越した日高
(「」一六四)

川
蛇になるも脇ひらを見ぬ娘の
気 (拾 五)

法螺貝を船の追ふ日高川
(タル一七八)

安珍は、日高川のほとりの
道成寺へ逃げ込み、かくまっ
てくれと頼んだ。そこで釣鐘
をおろして、その中へ隠して
もらった。

ソレそこへ来た釣鐘おっか
ふせ (万明三)

日高川途方にくれて鐘の中
(タル一三二)

道成寺湯濯場へやる気がつか
ず (拾 五)

安珍は手前で祈る気がつかず
(タル二、二四)

安珍は因果なところへ隠される
(「」二四)

そこへ蛇になった清姫がや
って来て、

あの鐘へかくしたろうと邪推
なり (万安四)

邪推の通り釣鐘の中にいる
(万天七)

鐘では済まぬ安珍の色出入
(タル一三六)

謡曲「道成寺」の文句に、
「一念の毒蛇となって、河を易
易と泳ぎ越し、この寺に來た
り、ここかしこを尋ねしが、鐘
の下りたるを怪しめ、童頭をく
はへ、七まといまとい、焰を出
だし、尾を以て叩けば、鐘はす
なはち湯となって、山伏を取り
おはんぬ。なんほう恐ろしき物
語にて候ぞ。」

とあり、それを川柳も、

安珍は死ぬまでとんとかくれ
た気 (拾 四)

釣鐘をくし善きにする恐ろし
き (拾 二)

山伏のへのこで鐘をとろけさ
せ (末 三)

道成寺鐘樓へ寺社の檢査來る
(タル一五三)

道成寺ろくろく尻で鐘を巻き
(「」一五、一三五)

山伏に釣鐘一つ寺の損
(「」九九)

鐘巻の大蛇も元は恋の闇
(「」一四)

と詠んでいる。

これで道成寺は有名になっ
た。

とんだこと恋でお寺の名が高
し (万安六)

たとい、安珍と清姫が結婚
できたとしても、

安珍はとても添つても腎虚なり
(万明五)

清姫は添ひおふせると釜舄ひ

(タル一一)

であろうと川柳では詠んでい

この清姫に因んで、謡曲「道成寺」が作られ、能に舞われて、毎年三月上旬、江戸城内の「お能拝見」の時には出演されたようである。それに使う鐘は、

拝見の鐘は三井か大丸か

(タル七二)

と川柳に詠まれているように、越後屋(三越)が大丸で調製したのであった。それは金ラン緞子で張った立派なもので、中味は竹籠であるから、

寺にない釣鐘亀井町で出来

(タル二九)

と、亀井町の竹細工屋で出来たものである。

能の「道成寺」を演ずると雨が降る。という言い伝えがあつて、それも川柳に多く詠まれている。

つりがねは嘘だが雨はほんにふり

(タル二二)

鐘を出て見れば江戸中傘をさし

(タル二八)

道成寺人のかけ出す雲が出る

(武二)

夕立がしてはねおどる道成寺

(タル五四)

三隅に負けず弓町降らず也

(傍二)

等と詠まれ、弓町には能役者観世太夫の邸宅があつて「観世稻荷」が祭つてあつた。それで三隅稻荷で宝井其角が雨乞の句を作つたのに負けず観世太夫が道成寺を演ずると雨が降るといったのである。

大詰は本雨になる道成寺

(タル八四)

道成寺降らぬも上手花ざかり

(武一一)

は、能でなく芝居の「道成寺」でも雨が降るといわれたのかも知れない。

芝居の「道成寺」は、長唄で演じられ、鐘供養のときへ

白拍子がやってくるのである。この狂言は、享保八年(一七二三)萩野八重桐が始めて演じたのを、初代瀬川菊之丞が修補して「江戸紫痕道成寺」を家芸としたのである。

たばね嵐斗釣鐘堂にのたをうち

(タル二二)

は、それを詠んだので、菊之丞の定紋結綿をそれに似た東襲斗と洒落ている。

その後、中村富十郎が、まり唄や山尽しを加えて「京鹿子娘道成寺」を大成したのが、

今日も演じられているのである。

鐘供養踊子が来てらるにする

(タル九)

鐘供養ばんくるわせが一人来る

(タル二三)

白拍子蛇になる時のいそがしさ

(万明六)

鱗ある肌とは見えぬ白拍子

(タル一一)

下着をば鱗と知らぬ美しさ

(拾四)

道成寺うろこが肌のぬき仕廻

(タル三八)

白拍子は、何回も衣裳を脱いで、持物も変わり仕舞にウロコ模様の下着になって蛇に化したことを表現するのである。

古今の大人初役の道成寺

(タル一九)

役者の法事石橋や道成寺

(タル二六)

追善興行にもよく出されたのであつた。

空箱

大西八歩

最近僕は貴い物の菓子とか、石鹸の空箱は直ちに風呂場のたき物

にして、始末することになっている。以前はもったいないと云う気持ちと、意匠の美しさに心ひかれて、保存していたが、使用価値のほとんど零に近いのに気がついた。それも五十才になって、やっと分つたのだから、いかに僕と云う者が、頭のめぐりの悪い男である云う証拠でもあるがだいたい空箱を、二度のお役に立てよう云う考えが、みみっちくて、間違っているのかも知れない。保存する時は綺麗な様でも、時をへると、箱の内側はしみがにじみ出してくるし、フタと身の色が変色して、ちぐはぐになってしまふ。結局、年一回の大掃除の時に他の不用品と一緒に、捨ててしまふ位が落ちである。それでも、しょうこりもなく、保存につとめて、五十才迄気がつかなかったのだから、我々らあきれかえつてものも云えない。もつとも是は、僕が若い頃の、つとめ先の教訓がそうされたのかも知れない。つとめ先は大阪船場の、ある衣料品問屋で、主人は勤儉力行型の典型的な大阪商人であつたから、一本の釘、一切れの綱でも、無駄にする事はやかましく云われた。だから、空箱等と云う大物は、仇やおろそかには出来ぬと云う考え方が、身につけてしまつたのであろう。主人はよく、出張先から、駅売りのお茶の空瓶やら、うどんの鉢などを、持

ち帰つて来た。しかし土瓶も、うどん鉢も、二度、三度と度重なる、御寮人さんも、始末に困つたらしく、「お父さん、お茶びんはもう、けっこうだすわ」と、断わられていた。

空箱でも、一番しゃくにさわるのは、クリスマススケーキの入っているやつである。何せ身よりも、蓋の方が、面積が大きくて、さかさまに使つた方が、形が良い位のものだからハガキ入れにもならぬ。おまけに、見た眼にはとても美しいと来ているから、まるで、商売女に、ひつかつた様なもので始末が悪い。

空箱について、捨てがたいものに、化粧品の空瓶がある。高級品ともなれば、中味より瓶の方に、金をかけてるみたいだから、無理もないが、これが又、ほんと、ものの役に立ちそうもない。洋酒の瓶であれば、一輪差しにしても、気がきいていて、ムーードを感じるが、化粧品では、口紅が小さくて、木も人らぬ。

先月、クズ屋が来たので、古新聞と一緒にクリムの空瓶を出したら、「どうもこれは金になりませんので」と云うのを、無理やりにもたせてやつた。夕方になつて、庭掃除を終つて、表のゴミ箱のフタを取ると、持ち帰つたと平り思つていた空瓶が、そっくり、中に捨ててあつた。



10月

路

集

虫

大西八歩選

標本に王者のような甲虫 深月
虫の穴一つを質屋見逃がさず 藤波
病人に見つめられてる灯取虫 涼髪
少年の孤独を虫にたわむれる 卯之助
アベックの話吐切れて虫を聞き 代仕男
句碑荒れて虫の音だけが興を添え 十九平
昆虫の整理はババが引受ける 輝次
夏草を刈るのが惜しい虫の声 博
ビルの窓都心と知らず虫が鳴き 仲太郎
庭の灯へ虫を鳴かせる水を打ち 同
国の父孫の土産に カブト虫 照見
踊りの輪逃げた二人に虫の声 岡甫
虫の息あつたと釜ヶ崎騒ぎ みのる
虫籠の蓋が開いた満員車 宗太郎
わら仕事士間のどこかで鳴くコロロ 光郎
カブト虫親も唄いて戦わせ 同
クルルだからと虫穴までも自慢にし 実男
ボケットで蟬が鳴いてる子の昼寝 同
虫一つ殺さぬ顔で税を脱け 九呂平
帰省して虫も懐しいものうち 蛸輪

コンパクトの手を休める虫の声 初甫
名も知れぬ虫高原を秋にする 草々
虫さえも殺さぬ顔で 智能犯 光
ジバートで昆虫採集済ませとき 一鶴
蟬取りが今日も昼寝を起しに米 たけお
虫の好かん奴だが課長と座に居 忠三
虫ケラの怒りが燃えた釜ヶ崎 尚史
蟬香が効いてビールに虫が落ち 万古
虫の音に尺八吹いてみたくなり 祥月
虫の声聞き分けて読む蚊帳の中 八九寸
パンガロー床の下では虫が鳴き ろ亭
新妻に仕事の虫がもの足らず 井蛙
虫押えに茶漬一杯かき込ませ 多良松
蚊いぶしのなつかし故郷の宵闇に 光道
虫の音がいつそ孤独をかきたてる 酔夢
メロドラマ虫も一役かかって出る 同
虫の音をステレオにする寺の庭 生薑
毛虫の言い分好きで生れた訳でなし 雄声
災害地もう鳴いている虫の声 圭水
鈴虫が夜店の情緒をかきたてる 孝風
虫ケラのように云われて小銭貯め 句念坊
打ち水へ虫の鳴き声ちよと止み 庸佑
昆虫という名でゴキブリ捕るれ 弘村
虫を引く蟻懸命の面白さ 晃康
虫千の部屋紐を足し紐を足し ひろし

辞典の字はつきりしない虫眼鏡 同
養蜂のキャラバン瀬戸の島につき 大八洲
残業の戻りを虫にいたわられ 同
何日米たか家の庭にも虫が鳴き 同
虫でさえ死んだふりして身を守り 静水
油虫派手に逃がした 蠅叩き 同
籠の鳥小中が食べてみとうなり 同
純毛だよと背広を虫が食う 同
野天風呂鳴いてる虫に星明り 蛙水
虫の声みんな聞いている療養所 同
這う虫にハンドル一寸横に切り 同
虫籠の外に出ている虫のひげ 同
佳
虫の音にうっとりしてゐる新世帯 雄々
道行の舞台へ虫の音がはいり 晃康
夜店の灯避けて螢屋店を出し 山椒坊
籠の虫何思うたかふいに鳴き 蛙水
虫のいい話はボスの顔を借り 井蛙
手衛する前夜しみじみ虫をきき 秀峰
張込みの刑事も虫の声をきき 愛場
天
虫の好い話を浴衣がけて聞き 恵二朗
軸
屋上で見れば人間蟻に似る 同
バスガール
友淵貴山選
バスガール笑顔でふりふり今日も無事 博
廻送車お客気分バスガール 不
バスガール嘘かまことよく喋る 市郎
踏切で降りて招いたバスガール 勝子

品質優良
タチカペン
TACHIKAWA PEN
タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ画紙
大阪市東区常盤町一丁目十一番地
立川ペン先株式会社

バスガールおきまり文句より言わす 藤波
松葉杖いたわる親身バスガール 八九寸
バスガールオラオライだけは声おとし ろ亭
嫁ぐ友乗せて淋しいバスガール 井蛙
バスガールお名残惜しい声でなく 圭井堂
新米のガイト景色がずれていて 同
バスガール動かぬ家が落ちつつ どんたく
運転手とどうのこうのとバスガール 祥月
切符切る鉄も軽いバスガール 雪美
お名残り惜しいといわなわなバスガール 実男
方言で客を笑わすバスガール 同
バスガール家へ帰れば無口なり 秀峰
バスガール足の太さへ年見せ 一鶴
バスガール虹を見つけたらしい日 淀月
尻餅をついて新米バスガール 光照
バスガール化粧直して車庫を出る 庸佑
バスガールこんな景色もまよくは 保夫
バスガール朝昼富士を見てあかす 九呂平
バスガールに比例運転手の無口 蛸輪
バスガール微笑は車の中のもの 峰水

手袋もよろよろ慣れてバスガール
むつかしい名前の木札バスガール
バスガール路切番へする笑顔
制服を脱げば恋ありバスガール
バスガール臨時コースは歌です
バスガール美声のまじり嫁に行き
バスガール台風予報も混ざって言い
バスガール事故の現場を祈り過ぎ
団参も終りバス嬢と握手撮る
バスガール見あきた景色に念を入れ
教習の時なつかしいバスガール
天二物与え給えバスガール
試乗するへつり腰のバスガール
炎暑にも声は涼しいバスガール
指導する古参イケなバスガール
進学の友を見ながらバスガール
バスガール下着の下まで検査され
バスガール面倒臭さに抱いて乗せ
音痴ゆえあきらめまたバスガール
バスガール運転台に花も活け
バスガールスワウ弁に切り替える
バスガール成田のおふだ客とうけ
家庭では地声にもバスガール
堂々と生体ですとバスガール
バスガール天下の名所唄で越え

作

バスガール不正乗車へ声 赤し 涼愛
バスガール顔へまとも夕陽さし 初甫
バスガールマイを持って標準語 木魚
バスガールの機嫌パンチに感じとり 忠三
バスガールガイドにしたい顔かたち 晃康
バスガール溜りで笑う別な唄 和三郎
バスガールバックミラーも曇らせず 静水
順々につめバスガールが下り 光郎
故障した中に掛けるバスガール 蛙水

バスガール運転台へ女房めき 惠二朗
山の子と見られたくないバスガール 雄声
立錫の余地へつけ込むバスガール 代仕男
バスガールライズを出して旅和む 孝風
バスガール均一的な声を出し 十九平
バスガール親切見せる程に空き 万古
地 天 草々
バスガール親切見せる程に空き 萬古
バスガールバックミラーへ片えくぼ 一鶴
軸 ドライブに誘えばいやとバスガール

留守

中島小石選

留守勝隣隣の事を又きかれ 仲太郎
倦怠期夫の留守にあるブラン 周甫
妻の留守よこした食器を積みあげる 弘道
留守番に番の要りそな留守をさせ みのる
妻の留守インスタントの日が続き 豊年
世話やける孫だが留守の物足らず 同
後つけて来なのに居留守ひっこす 宗太郎
狙われているのに留守にする呑気 繁太郎
留守番に集金よく来る日が当り 句念坊
留守番がいらいぬと団地飛び歩き 照見
二度は留守ととも聞ておき 木魚
留守に来て隣で井戸水もてなされ 拳児
留守番へ土産の方が高くつき 庸佑
お隣りの留守も知らない団地族 晃康
留守勝の妻は役名三ツもち 同
蠅叩く他用のない妻の留守 弘村
頼りない留守番手紙かいておき 静水

留守番のついでに子守も頼んとき たくお
今声がしたのに女中留守と言ひ 忠三
留守番もやっぱり折て昼を食へ 実男
帰るまで待つと居留守を慌てさせ 同
砂糖壺の場所もわからぬ妻の留守 雄々
留守番をする兄の脊丈が見直され 同
隣席へ留守を頼んだトイレット 万古
近づくサイレン留守居あわてさせ 光道
留守番がどこへ行ったか聞いたまま 保夫
旅先の新聞留守を気遣わせ 九呂平
子供達に留守を頼んで市場籠 蜻蛉
留守番を風邪引軽く引受ける 初甫
妻の留守こうまで探すもの多し 草々
休日の留守居に付いたプレミウム 光昭
人が居るようにラジオをかけた出る 祥月
チョット留守へ空果のタイミン 一鶴
留守番が庖丁を研ぐおせっかい 淀月
病人を一人残して皆田んぼ 勝子
居留守つかうことも馴れたお手伝い 藤波
留守番は植木の水にも気をつかい 同
福祥がけ詫び急用へ留守居 八九寸
出張の夫の留守に無事生れ 涼髪
絵葉書で旅のブライ留守へ書き 井蛙
留守番へ百十番も教えとき 圭井堂
留守と云えと云つてるらしい電話口 どんたく
旅の留守隣りへ猫を頼んどき 蛙水
ちやぶ台の上座を占めてバスの留守 惠二朗
気の抜けた風船みたい妻の留守 同
留守宅へ重い中元引返し 徹也
留守にした大邸宅のただ広さ 同
来客へ留守をばらしたクシャミが出 好女
やれやれと帰れば妻の置手紙 雄声
課長留守テレビを囲む甲子園 古心
妻君は留守だと別居まだ隠し 生薑
留守番もよし大の字に昼寝する 旭峯

留守番が電話一つに舞わされる 圭木
留守勝の夫人へ近所の目が険し 十九平
パパの留守今宵は早く寝るとする 同
留守中の注意を示す箇条書 同
留守番を頼まれたばこも売らされる 孝風
留守番は正札通り堅い事 不酔
宿泊を宛にしていた友が留守 輝次
佳

留守の間に夫婦帰った慌てよう 孝風
留守番に急用出来た肩替り 万古
昨日の飲んだままミルク受け 九呂平
思惑のある留守番はおとなしく 庸佑
鉄瓶の留守をたぎってふきこはれ 光郎
人 押し売が男は留守と知つた声 和三郎
地 すらすらと居留守を秘書が使い分け 宗太郎
天 留守番に豆の皮むき頼んで出 十九平
軸 寄せ書をして留守宅の無事を告げ



不朽洞の人々



病いを養う新聞同天子氏(廣州市)

は——と。

もう三年、高血圧にたおれてから、こどものとった写真を見ればこんな恰好だ。
右が全全利かないが、まだ若い、もう一度利いた時は——と。

落着きのない此頃を表象し

(同天子)

張、同温泉で一泊された。「湯田の湯で肝障害をあたためる」▼吉田圭井堂氏(堺市)は九月三日夫人同伴四泊五日の予定で北陸の旅に出られた。昭和十七年に来た鐘釣温泉も少し様子が変わっている。白雲楼は昔のままだに威容を誇っています。「どこもかも湯街は妙に焼けたる」▼西辻竹青氏(奈良県)は室生村議会視察員として北海道視察のため九月十三日空路千歳着、各地を見学された。「合服に着かえて北海道につき」▼堀仙洞氏(大阪市)は九月十二日蒲郡、三谷温泉に遊ばれた。「わが部屋へ道をたずねるあはらしさ」▼渡辺伊津志氏(徳山市)は海上保安部で日夜活躍されているが、重油荷扱きの大事件をかかえて、暑中休暇も返上、酷暑を吹っ飛ばしていられる。「倅は寧ろ海か海の海女」▼小西無鬼氏(兵庫県)から、「川柳まつりの特別課題で、わが篠山支部が一席、三席を獲得、二度目の優勝を

したことは他支部に対してもこんな鼻の高い時はなかったのに、当日の祝宴に参加せず失礼しました。これを機に、日々川柳すること人間陶冶と心掛けております、思いを新たにしてお勉強する所存です。▼杉本一鶴氏(貝塚市)は手術後三年有余のうちでこの夏は比較的調子よく明るい気持で療養して居られ、両肺手術による機能低下で歩行は思わしく出来ぬが、座っている分には障りなく、必ず自活出来る



第八回川柳まつり——優勝者記念撮影、後列左から諸部主幹・篠山支部のひか平優勝者・文彦・無鬼・葉・永新・前列左からいさを・水客・越山・肇吾・春里の諸氏

ものと信じて、最近桃の種を材料に手芸品の制作に精を出して居られる。▼梁山快夢起氏(ホノルル市)夫妻は、米客の応接やら、種

々の社会奉仕の仕事やらで車をあちこちと飛ばし多忙を極めた日々を送っていられるが、とても元気で愉快な毎日であるとの由。▼小田つやかさん(シカゴ市)から「シカゴの記念券がお目にとまりとても嬉しく存じます。川柳を余生の楽しみとして集う在米柳人の和を感じる者の目にもたのしい雰囲気を感じさせ、斗い尽した人達の憩と云ったものも感じさせられた幸甚と存じます。▼黄瀬美秋氏(滋賀県)から丁寧な書中の見舞状に接しました。「炎暑にも否むはなしはすきまり」▼小島孝夫氏(大阪市)は九月八日、やっと仕事の間合をみつめて療友の故野中総一氏居を訪問、露を慰められたが、故人が生前世話話を続けられた養鶏の鶏が、無心に餌をひろっているのに心を打たれた山。(重)

柳人連盟から発行された。国鉄川柳人連盟が結成されて五年目、第五期目の句集で国鉄人百三十余名の句が集録されている。定価百円。▼高橋月南句碑建立記念「紫雲」が昭和三十六年八月二十日奈良県生駒郡平群村植原川柳つみ社から発行された。▼「川柳みずばしら」が一九六一年九月二十五日に後援青柳会第一句集として刊行された。新書版四六頁。発行所飯田市リンド書本通り、マルサンデパート横、後藤ゆきを。

▼清水白柳氏(大阪府)の長女の居父が八月八日死去された。謹悼。▼野中総一氏(奈良県)は、左肺成形手術後自宅療養を続けていられたが、六月十九日咯血のショックのため死去、年四十二。謹悼。▼石田沐天氏(大阪市)は六月廿九日に済生会西成病院へ入院、七月五日午後二時四十分、穿孔性腹膜炎のため長逝された。行年五十九才。謹んで悼む。

▼本誌八月号九頁下段十八行目の舟遊氏の句は三司氏の句と類似のため取消。▼前号七頁中段七行目の句、極東とあるは極楽の誤りに付訂正。▼同四十三頁、二段、十一行目の句玉蛙とあるは静水の誤りに付訂正。

不朽洞

▼第二室戸台風が近畿を中心に猛威をふるったため、川柳雑誌社をはじめ、不朽洞会幹部の関係会社や私宅が大なり小なり被害を蒙ったので、その後片づけに忙殺され、会員被害の状況がつかめず、未だに不朽洞会の常任理事会が開かれないありさま、何れ月未までには開いて善後策を講じたいと思っている。▼長尾成島氏(名古屋市)は家事の都合で九月限り退会された。(多)

会から

落着きのない此頃を表象し

一つの抗議



後藤梅志

川柳雑誌九月号に、直原七面山氏の「柳魂練磨」というのが載り、川柳塔作家の古方、一瓢、鉄児、日満、春雄の諸作家の作品と、斯くいう梅志の作品が一々その不備な点を指摘され教えをうけることになった。筆者七面山氏は岡山県の一地方作家でそれ程に実力のある作家とも思えないが、川柳塔作家の作品を一々添削してまわるとは加わり大胆な行動である。まして前記の諸氏は七面山氏に添削を頼んだ覚えはない。作品に私そんな覚えはない。作品に対しその作品価値を云々し、つき進んだ意見を云うのは、句評という一つの形式をとる場合に始めて許されるものであって、これは今迄にあまり例のないことである。ことに七面山氏のふれたことは句の本質に災することではなくて、全くてにをはをひねくり廻した程度のものであるに至っては、まさに正気のサタではない。これはコドモの遊びゴトである。

七面山氏がおそまつだから出直せと、指摘している私の句は
 テーブにもとられ稽古も染でなし
 という句だが、テーブにも、のこの字が、脱字になっている。これは七面山氏の粗こつか編集者の間違いか知らないが迷惑な話である。
 この句は、昨今テーブレコード1というものが市販され、少し金をもっている者は重宝だというので盛んに購入している。長唄であろうが小唄であろうが、謡曲の場合も同じで、師匠の声をそのテーブにとって自宅へ持帰り、練習用に供すると便利で重宝だと簡単に考えやすい。しかし何べんテーブを廻してみても初心者にはなかなか覚えられない。それもその筈で、師匠はテーブに吹込む場合は本式にやるから、日頃習っている節や調子とはちがっていて、結果はお弟子さんの期待に反する。しかしテーブの希望者は物好きも手

伝って、あとを断たない。この吹込料は大抵タダか、精々一ぱい出る位なもので、吹込みに対する師匠の芸術的良心や苦心は分らず、実は骨折損に近いものだ。これも弟子可愛さからすることだが、仲々らしくでない。
 こういった内容だが、これは余程カンのいい人でないと分かるまいと思う。さてここに問題があるのだ。
 この句なぞは決して、必ずしも難解な句ではない。少しく現代の世相に通じている人なら川柳家でなくても分かる。いや、分かります。すくしたから、抜けたような句だ。しかし川柳というものは誰れにでも分かるものでなくてはならない、という。とはいっても限度があり、句境が進めば進むほど、初心者の頭脳では分かりにくい句を作るようになる。これは一般にそうである。これでいいかどうかという疑問は私もいつも持つて作句しているが、或る一面に、分かり易い句に仕立てると句が月並の句になって発表する気になれないものだ。「てにをは」の如きものも、少々は分かりにくくはあっても、自然に、自然に心掛けて、句のイメージをこわさないように努力しているのだ。又ことわっておくが、川柳は、川柳家は、他人に分る句でなければ作ってはいけないという義務は、一つもないものだ。

これでいいかどうかという決着は、川柳塔へ出句して路郎選を経るという行き方が、今の私の行き方だ。
 どうも七面山氏の指摘する前記諸氏はどの作家も七面山氏よりは先輩に近く、作家としては進んだ作家だ。この人達の句を傷もの扱いにすることは全く思い上った態度ではないか。七面山氏の言とは反対に、自然に一人、一人、カラーがにじみ出ていて、原句の方がよっぽどいい。その人らしいということは、作品として好ましいことなのだ。
 殊に日満さんの
 容姿端麗女房を二三寸凌ぎ
 という句なぞは立派な作品で、このまま句評にかけて経験作家の句評がききたい位だ。
 ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★
 ペンにもあたたかさを
 不二田一三夫
 かつて某誌で後輩が先輩の句を評したとき「三下奴」というコトバを後輩に浴びせた先輩があったが、川柳家に三下というのがあるのかどうか。後輩が先輩を怒らせたとことはその筆が稚拙すぎた今日ではないか。礼儀のうすれた今日、せめて川柳人だけでも礼儀と情愛をもちつづけたいものだ。
 直原七面山氏の「柳魂練磨」も

後藤梅志氏の「一つの抗議」も、ともに依頼原稿でないことを、おことわりしておく。
 ★
 野中稔一君を
 偲ぶ
 河楊梵鐘
 稔一君が亡くなったと、小陽さぎす君からの、突然の知らせを手にして、驚きともなんとともつかぬ複雑な気持ちに打たれた。
 季節の挨拶のほかは、ときおり思い出したようにたよりを寄越すくらいで、あまり筆まめとはいえなかったが、奈良県桜井市の両親のそばで、気ままに鶏の世話などして、ますます無事であることとばかり、今の今まで思いこんでい

味のてー

モダン 川柳

心齊橋大丸北の辻東へ

御門

TEL 27 6684

御集会には階上御利用下さい

金 泥 集

課 題「童 話」

麻 生 葭 乃 選

種切れて孫へアンデルセンを読み 阿茶
 童話劇みんな鬼になりたがり 同
 童話集きつね悪役ひきうける きさ子
 童話集姫と王子の悲恋にて 同
 童話劇 P T A はごぎの上 徳子
 童話劇の放送時間児もおぼえ 同
 大江山漸く着けばもう眠り 周甫
 童話集積んで子供のボスになり 同
 即興の童話夜ごに児をねかせ 酔夢
 童話ばかり読んで長男ひよわすぎ 同
 むかしむかしと孫が暗記をしまい 一栄
 聞かされた童話そのままに孫に 同
 アンデルセン夢の世界の小伙伴とき 美喜
 未明、賢治子供ころを育てくれ 同
 子の夢は童話の中のお姫様 清子
 善悪のけじめをつけた童話集 同
 童話よりピストルがいやと元氣な子 章子
 開けるなら祖母の童話をもう一度 同
 イソップの話世渡りしてさとり 俊江
 ピストルを二丁童話も知らぬ子等 同
 放浪の詩人もいつか童話かき 奈以子
 きびしさは童話の中にひそんでい 同
 夢の国へ誘う童話にある魅力 都詩子
 童話集童話のうらから掃き出され 好女
 ヒロインの仕合せ謎がとけてから 葭乃

次回題「刺^し激^き」／切十月末日

ただけに、冬ごろから床についていたなどは、夢にも知らなかった。

六月の十九日に咯血し、そのま
 ま意識不明におちいり、そして矢
 継ぎばやに訪れた死。いまさらの
 ように、肺病の業の深さを思わず
 にいられたかった。

四十一才といえば、まだこれか
 らである。昭和十七年ごろの入院
 だったというから、二十才前後の
 青年時代からずっと、病気を背負
 っであゆんできたのである。そし
 て、そのみじかい一生は、なんと
 いうはかなく悲しい宿命だったこ
 とだろう。

終戦後しばらくして、自然気胸
 という大変な目にあい、後年、胸
 廓成型術をうけて、さし迫った不
 安はいくらか薄らいだかもしれない
 が、つねに胸をいたわるように
 して、しずかに行動していた。彼
 の句にはよく「孤独」の文字が出
 てくるが、それは、あるいはまだ
 そのときのショックが尾をひい
 て、暗いしじまに自分だけがとり
 残されているような、淋しさから
 だったかもしれない。そのせい
 か、病氣と取組んでいつも自分を
 見つめている句が多かった。

だがまた一面、彼はすぐれた典
 雅な句を示して、私たちを懺嘆さ
 せた。それは彼の、柔和で、感情
 の美しさをもがたるものといえ
 よう。そうして彼の眼が、その美

しさに向けられている時に、私た
 ちはなぜかホッと救われた気持ち
 なるのであった。

なんといってもふるくからの郷
 人であり、戦中戦後を通じて、千
 石荘の川柳会では、津田千舟氏や
 故人となった千原庸司氏らと共に
 重要な人物として、その力に負う
 ところは大きかった。路郎先生を
 お迎えして、庸司氏といっしょに
 先生のお傍にいて「体温川柳会」
 と命名していただいた当時の様子
 を、小誌「体温」のある号になつ
 かしそうに記していたことを思い
 出す。

その稔一君もいまはいない。久
 留米餅の袂へ片方の手をつっこ
 んで、口数はすくないがいつも柔
 かな笑みをたたえ、はずかしがりの
 くせに心易い仲間とはよく冗談を
 交わっていた彼が、いまも目に泛
 かぶ。

昭和二十八年四月、十年ぶりに
 退院してなつかしいわが家へ帰
 り、肉親と共にあるこれからの平
 穏な人生に希望をかけていたこと
 であろうのに。

両親に見まもられながら世を去
 ったことが、ながいあいだ孤獨感
 に苦しめられた万年青年稔一君に
 とっては、せめてもの慰めといえ
 ないだろうか。

稔 一 句 抄

花潤む人のいのちもかくや

ある
 食慾のない眼が皿の絵に落
 ちる
 書見器に黙す一日雨やまず
 水にもがく蠅ひややかに見
 て居たり
 笑ってる時も孤独はそばに
 居た
 散る桜手に受け看護婦の若
 し
 十年振りに退院す
 床上げへ母のはたきの手が
 軽し
 正月が二度来る村の平和な
 り
 何分咲きなどと桜よおかし
 かる
 鶏飼えばとりにも四百四病
 あり
 檀家から帰る尼僧は梅を持
 ち

ヒゲそり後に…

●美容衛生剤 G11
 ●アラントイン
 ●水溶性ラノリン

配合

男性 200⁺
 アストリンゼン

いのちある句を創れ



投稿規定

▼用紙は原稿用紙▼文字は正
僅▼締切毎月十五日▼投稿先
本社宛

本社 九月の会 (大阪市)

9月7日 午後6時
会場——関西会館

ベルリン問題をめぐってソ連の核実験
がはじまり、また死の灰へ川柳で抗議す
るきようこの頃。本月は川柳忌句会の月
である。路郎主幹は「川柳忌とわれら」
と題されて、新味を出せ、個性を出せと
叫ばれた。この日、恩師から左の六氏が
新選者として紹介され、わが選者陣にま
た新しい力が加えられた。山川阿茶・木
村十悟・伊達源子・早川清生・本多柳
志・橋高薫風子諸氏の門出を祝福する拍
手が会場にどよめくところ川柳のたくま
しい前進を感じられた。この記念すべき
川柳忌句会に川柳玉造支部が誇る新鋭城
正一氏が本年二回目の不朽洞賞杯を獲得
された。おこることなく黙々と研さんす
る者の栄光はこのように輝やくのであ
る。

(F)

出席者——路郎・舟遊・古方・一三夫・
水京・柳安子・正一・静馬・文秋・多久
志・十悟・大丘子・薫風子・夢紅・いさ
む・狂二・蔵児・八郎・源子・生々庵・
繁雄・いわを・白柳・紫香・竹莊・清

人・柳志・賀峰・昌雄・与呂志・榮・敬
太・三司・南宗・阿茶・愛論・庸佑・安
子・夢乃

兼題「波」 麻生路郎選

波のない安定株が気に入らず 圭井堂
白い杖人車波状の夕まぐれ 八九寸
波に寝る暮しも住めば都とか 一鶴
北斎のえがく波間に富士のぞき 瑞歩
人生を波にたとえて子をさとし どんたく
夏惜むささやきに似て波の音 光道
ふるさは雨波頭だけ白し 白柳
しやく銅の肌大波に逆らわず いさむ
失恋が室戸の波を見に行けり 薫風子
波風ももう一昔始近き 繁雄
人恋し人煩わし波の音 榮
波も知らずワイフしやりに株のこ 賀峰
跳び込んでも蛙は蛙だけの波 八郎
四海波静かなり刑事部屋 賀峰
伝説の沼のささなみ怖く見る 愛論
養老院へやって波風しずめた気 静馬
男盛り波を蹴立ててゆくことし 薫風子
砂浜へ波はマチスに負けぬ画家 夢紅
身をもつてぶつかって見ん波のごと 阿茶
岩をかむ怒濤も景のうちに 竹莊
人生の波にもまれたのどしわ 失名
波たのし母子で膳の濡れるとこ 三司
引き際の波に小蟹はさらわれる 紫香
波一つ乗り越えて来た自信 すむ
新しい波とは男バーマかけ 一三夫
波風を立てて養子は消えてゆき 白柳
人の波ボリスは逆に歩かされ 静馬
大波が過ぎて我が子の頭見え どんたく
荒波は亭主にまかせ妻太 正一

兼題「無免許」 若本多久志選

頭刻る国家試験に又はずれ 大然
無免許の医者親切でよくはやり 水京
無免許のあんま話しは上手なり 昌雄
自動車は出来たが免許まだ下りず 三司
堂々と開業無免許とは見え 柳安子
あてられたのも無免許でつづられ 源子
無免許を承知で買った家伝葉 正一
相手が悪いのに無免許叱られる 白柳
無免許の事故で仏も浮ばれず 生々庵
無免許の医師とは知らぬ手術台 一三夫
一町も行かず無免許とがめられ 賀峰
免許証聞かれカミナリ頭かき 瑞歩
無免許の方が思いきりとばし 庸佑
無免許の車女性を乗せたがり 清人
無免許の事故で議員泣きつかれ 正一
無免許はあつさり頭下げておき いわを
里帰り耕運機で父迎えに来 与呂志
慰謝料へ無免許だったという弱味 舟遊
無免許の車は別の道へそれ 南宗
無免許のアンマは美人揃いなり 阿茶
ポリ同乗無免許警察まで運転し 生堂
無免許が免許を雇い美容院 阿茶
三面の隅に無免許二三人 多久志

兼題「福相」 黒川紫香選

福相の割に淋しい懐手 生堂
福相は街の手相へ寄りつかず 太然
福相は見合写真に母乗り気 正一
あこなでていれば福相それでし 愛論
福相のやもめが住んでる裏長屋 蔵児
福相のどこかに抜けたとこ 静馬
福相とはめて美人とは言わず どんたく

兼題「座興」 戸田古方選

福相があると云われて金を貸し 流水
福相の和服お庭を散歩する いさむ
福相に仲々運が向いて来ず 賀峰
福相のわりに金にはケチケチし 水京
福相の中年女給にもってて 敬太
眼鏡掛ける福相になってこず 白柳
福相の客が目立つ通夜の席 生々庵
「フツ切ったとんに福相やフツ言われ
福相のまま下サ回りの三味をひき
福相を見込まれ会計たのまれる 十悟
福相も鏡馬に凝ってから変わり 圭井堂
福相の夫の方が若く見え 南宗
金が身につけば福相らしくなり 文秋
貧乏を別に福相気にしてず 紫香

仲居ふと座興を真顔で批判する 清人
上手すぎ座興にならぬ黒田節 八郎
社長の内隠し芸妓徳利おき 水京
下手でよし座興に踊る奴さん 八郎
まあまあと座興の罪にしてし 圭井堂
酒をかり座興にしとくても使い 一三夫
その仕草座興にしてはふふ落す 柳志
座興ではすまぬ皮肉へひつかかり 繁雄
座興たけなわ幹事一寸一服し 狂二
振られたら座興と言葉に「しとしと」 阿茶
生酔が座興にまかせ罪な嘘 すむ
座興とも今更言えす本気なり 庸佑
座興一つ出ぬ宴会に肩がこり 多久志
酔いつぶれ自慢の座興出し 三司
座興にしては少々刺があり 句念坊
ただ一つどうも出る 八九寸
行き過ぎの座興となった居合抜

井をたたいて隣りを歌わせる 光道
いいお酒ですなど盛興はめられる 文秋
お盛興にしてはしずし舞いおきめ 生々庵
盛興にはするが生命をかけた芸 賀峰
タイミングうまい盛興になつてた 古方

席題「用心棒」 長谷川三司選

ペコペコと小遣いもらう用心棒 一三夫
用心棒ボクサーくずれという構え 南宗
用心棒ボリス仲間顔が利き 柳志
前貸しをしるればこわい用心棒 堀子
強よそうな奴は逃げとく用心棒 一三夫
用心棒国の訛りがまだとれず 蕨風子
用心棒昨日の敵と飲んでおり 多久志
用心棒ズボンの折目きつちりと 白柳
借金のことわり用心棒にさせ 竹荘
用心棒隣りに据えて酔いつぶれ 生々庵
大男だけが取柄で用心棒 正一
用心棒注射に弱い男なり 阿茶
ボーイフレンド用心棒のつもりなり 庸佑
用心棒一足先に酔いつぶれ 十悟
殺し屋といわれ用心棒とも言われ 南宗
用心棒先ず一升をあてがわれ 榮
用心棒女に弱いとこがあり 南宗
ふいとガム用心棒は吐きすてる 紫香

席題「良心」 菊田いさむ選

良心も見えずくさもつれてき 十悟
良心が和解する気になつて折れ 竹荘
良心がやっぱりあった自首をする 阿茶
良心を疑うよな実験又もやり 水京
人間失格良心を置き忘れ 三司
良心と別に男の意地を買い 賀峰
良心にきいてごらんとミシシ踏み 榮

良心がおますか本妻泊っている 生々庵
世相悪小ぢやな良心見逃がされ 柳志子
父ちゃんの良心らしい折詰つづき 正一
良心で食えるかいなと居直られ 愛論
良心へ頼かむりして我を通し 阿茶
良心がコーヒーだけで別れさせ 清人
良心的と言う店のきたないこと 水京
良心が許さず地道な職で生き 南宗
子供服だけは残していた空巢 一三夫
良心に任せるからと突っ放し 柳志
良心の苛責先ず母親へ打ちあける 柳宏子
交番の花良心が今日も替え いさむ

席題「アルバイト」 本多柳志選

ぼんぼんのバイトお店の邪魔になり 静馬
コマージュ今東光のアルバイト 一三夫
きつちりと時間に帰るアルバイト 紫香
アルバイトさきわどい事もやつてのけ 水京
欲と道連れになつてしまったアルバイト 柳宏子
バイトする女子大生を危なく見 一三夫
アルサロという名で生きる女なり 十悟
アルバイトの汗で小荷物届けられ 賀峰
アルバイト当てにした日を休まれる 白柳
アルバイト男の方が売れ残り 紫香
匿名で売れぬ作家はクイズ書き 一三夫
アルバイトこんなんつもあり無いサロン 堀子
日焼けた顔で戻つたアルバイト 南宗
伝票整理へアルバイト邪魔になり 白柳
制服を着て礼に来るアルバイト 正一
アルバイトの方に家を支えられ 十悟
学成り難しアルバイト業となり 多久志
卒業はしてもバイトは続けてい 藤児
あの店にや過ぎた娘だったアルバイト 正一
アルバイトお酒の味も覚えて来 清人

アルバイト貯めて寄付した記事となり 榮
アルバイト真面目を買われ就職し 阿茶
アルバイト世間の裏ものをのぞいて来 阿茶
アルバイトしても勉強辞を抜き 大丘子
アルバイト社運興亡ピンと来す いさむ
アルバイト社員を夢を持ちつづけ いさむ
アルバイトなら角帽も持つて行き 多久志
アルバイト自慢でおそろ戻つて来 柳志

(庸佑清記)

川にしなり支部句会(大阪市)

後藤梅志選

日曜の乳房ゆらゆらトロを押し 葉平
天国と地獄道頓堀の朝 白柳
遮断機をはさんで子供話して居 庸佑
遮断機のように一線こえさせず 生置
顔の効くことないのと同志なり 文秋
文無しが振替出勤買うて出る 舟遊
遊ぶ金丈けは文無し都合する 六童子
置手紙文無しだけに案じられ 堀子
文無しのボツケパチンコ玉ふたつ 唯義
文無しの十円かりるあてもなし 慎太郎
世界的視野を尻目に移ぎはり 利幸
妻らしい視野の中から小言いう 旅風
山の雲視野を立体的にする 良
苦行三昧官の視野に射す光明 梅志

川玉造支部句会(大阪市)

西出一栄報

多忙でも名士名だけの役をうけ 守信
上役の多忙は夜の部が多く 正一
新聞紙日除けに退社のバスを待つ 柳宏子

日除けして風鈴の音が愚うなり 一栄
水遊び産湯のたらいタガをしめ 井平
計画の一步は模型から作り 義介
模型とも云えぬ値札に舌をまく 風仙洞
結局は兄が手伝うプラモデル 文秋
参観日母の冷汗気にしてす 清子
落口のうしろに社長立っていた 水京

川阿倍野支部句会(大阪市)

金井文秋報

盆踊り狸もうかれ出て来そう 恒明
新品にない味が好き中古品すむ 庸佑
すしばかり食つて愛想のない女 文秋
素人のすし飯粒が掌にのこり 梅里

全出席者(九月現在)

路郎・愛論・圭井堂・文秋・一三夫・藤児・柳宏子・阿茶・静馬・舟遊・庸佑・水京・蕨風子・宏子・腹乃

天位受賞者

①一三夫②水客③圭井堂④恒明・南宗・正一⑤生々庵・雅堂・葉光・静馬・阿茶・紫香・柳宏子・多久志・①鶴汀・進之助・梨花・柳志・黙平・舟遊・万の・牧人・潮花・古方・藤児・梅志・白柳・夢虹・堀子・水洞・真砂・すむ・狂二・晃・清人・文秋・賀峰

不朽賞杯受賞者

③一三夫②水客・正一①鶴汀・南宗

いいトロを前に女の柳腰 梅志
水商売年中家作やり直し 生薑
やり直しすればする程悪くなり 喜仙
マアいいと言うに棟梁やり直し 白柳
頭一つかいて素直にやり直し 柳宏子
やり直す執念に生き 発明家 一三夫
宿題を親子一緒にやり直し 小松園
青い目もリズムにあわす盆踊り 万里
やり直しネジを一本見失ない 唯義
和解した酒の底から崩れかけ 十悟
端株持ち世界の平和気にかかり 葉光
人の和が崩れて会社四面楚歌 六竜子
西東譲れぬ儘の和を望み 堰子

川維 淀川支部句会 (大阪市)

木村水洞選

旅装まだ解かぬに子供来て開み 博
ひとり旅のこゝろ流れる雲に似て 葉光
ハネムーン帰れば新築出来上り 竜泉
道づれが旅の疲れを消してくれ 幽谷
旅情しばし潮騒に身を托し 三十郎
お茶漬けを所望している旅婦り 東洋男
旅先の宿の広さへ子は跳ねる 礼司
担ぎ屋が旅のムードをかき乱し 七面山
旅に来てふと郷愁の遠花火 麦太樓
百円の八卦気になるとこで切り 水洞
同伴の金を目あてに飲んだだけ 瑞歩
ワッつれレディファスト少し照れ 句念坊
同伴で先祖の墓にぬかまづき 仁齊
妻の株上げて同伴から帰り 孝夫
温泉へ母を同伴するゆとり 陽子
銀燈の旅はデラズで茶をはき 清生
同伴ではつきりさせた夫人の座 若菜
夜店の灯月に一度の妻をつれ 久米雄

再会へ斗病時代の影もなく一鶴
再会の知らせ床屋へまず走り 秋月
再会の日を夢にみる靴磨き 香林

川維 京都支部句会 (京都市)

田中鳥雀報

ご先祖をお金に代えて沈む村 幸男
心沈めばお櫃の底にふれる音 司郎
売れ残る電話は42の4989 鳥雀
9がかわらないので恐る恐るのクッする 春抄
セールスが儲けて困地振り返り 藻介
徒歩五分の困地が遠い草いきれ 和三郎
閑人が今太陽を逃げる位置 磯
閑人の石を拾うて磨き上げ 紫蘭
禪寺の吸物らしく麤としゆん菜 生薑

川維 備前支部句会 (岡山県)

横山一声報

本堂の裏で学資の豚を飼い 芳月
油屋が近所で火災保険かけ 秋月
暑中見舞投げ込んだ手が汗にぬれ 久米雄
電化してもやっぱり駅は遠いまま 万女
出来るだけやるとして何処までか 三六
玩具屋で放さない子に負けて出る 胡凡
御先祖のかたみ桃栗柿があり あやめ
挨拶も隣からかは焼きの匂い 東岸
倦怠期母はなかつたように言い 伊久野
泥んこの靴で出かける倦怠期 賤女
倦怠期猫が邪けんにつとばされ 輝次
初恋の人が恋しい倦怠期 浄美
倦怠期かくす化粧にむらがあり 博
この何処が好かったかいな倦怠期 明良
倦怠期なんてないわと惚けられ 一声
二人共無口になった涼み台 春海

食品と科学

食品と原資材・機械・包装の総合誌

10月号発売中

180円 (〒18円)

特集

水産調味食品の概況
魚肉ソーセージの現況と方向
かまぼこ製造に関する諸問題
フグみりん類の加工法
水産調味食品の包装

講座

食品工場の衛生 ⑤
界面活性剤の利用 ⑫
食品官能検査 ⑥
食品包装紙 ②

◇海外ニュース ◇特許ニュース
◇意匠ニュース ◇商標ニュース

〔展望台〕主食・罐詰・菓子・飲料・添加物

大阪市北区
東区 9373
大阪電 9373

食品と科学社 大阪6702番

川維 米子支部句会 (米子市)

小西雄々報

三男のひがみ無口にしていまい 正洲
約束の場所無口のまま別れ 竜泉
ペンダコの大さへ動揺影をうけ 蛙眠子
ワンピース十二単衣をみて笑い 一机
生活の不安が続く雨が降り 無閑
光陰は素顔の妻に牛耳られ 雄々
横文字も混せて娘の日記帳 鶴丸
坪万もする駅前草が生え 翠月
貯金箱足りない釣りを借りられる 明甫
映画代上げて内容おなじこと 福女
大阪は銭さえあれば良いところ まさよ
外出へクリューもぬり傘も持ち 秀峰
嬉しさは五尺歩けた小児マヒ 酔歩
夕立の雲へあわてた市場籠 吾柳

川維 弓削支部句会 (岡山県)

直原七面山選

百合生けて今日の腹立まぎらわし 生薑
速記者を声迷わせてる国なまり 天仁坊
我がままで愛を拒んだ日の悩み 算馬
青春の悩みニキビとともに消え 知恵美
トシが怒々ひしめき合える世を眺め 三四郎
酒の味わかって人生狂い出し 榮
入院も雨退院も雨になり 杏朗
春雨に濡れても行けず最合傘 同甫
楚歌ならで四面蛙の声になり えき子
腕により掛けた料理で新夫を得 甚六
やせ腕に妻子と氣がぶらさがり しおり
夕立にデートの時間が氣に参り とよ子
アベックの噂きき出す敬重 江
新妻が髪食い込んでる夕仕方 みつ江

子が出来てからの女房は返り 七面山
川維 高知支部句会 (高知県)

大西 迷窓 遷

化粧品サンブルだけは貰ったとき 砂丘
生娘のサンブルとでも云いたい娘 木精
文無しがサンブルはめだて去に 松月
サンブルを一ぱいづつめて初外交 秀峯
サンブルへ以上にしる女店員 吹雪
京染屋サンブル片手に世辭を云い 百日紅
見本だけでもセールスマンはおき 久江
サンブルは子に貰わせて貰いもせず 醉雀
情熱で誓いし事をもう忘れ 昌香
情熱を仕事に燃やし 五十年 博理
情熱をかける稻作土と親しむ 平男
情熱をすぎた意見と腹が立ち 水源
情熱は相手の短所見逃して 敵道
清貧にあまんじ情熱子にそそぐ 利子
情熱と斗志でつづく延長戦 波浪
情熱のやり場唇ぐつとかみ 曲汀
山の娘の情熱新芽のようにもえ 千佐子
寝ていても詩人の胸は燃えており 幸
燃える恋も貧しき故に燃えきれず 幸泉
情熱が足りないなどと妻は云い 蟻蛇
情熱をたつぷり持つて無口なり 松竜
情熱で濡れている よな紅椿 正光
情熱は秘めていますと冷たい手 俊一郎
情熱をスクリーンで味う年になり 和香春
情熱と情熱ふすまは閉じられる 迷窓

杏林 川柳会 (大阪市)

帰ったらデパートファーストとはいかず 一哲
帰朝してヤレヤレと思うは僕だけか 太希志
年やなあど帰朝本音をはいっている 阿茶

帰朝して頑固さチツとまじになり 五十六
日本の良さもわかつて父帰る 瑠枝郎
一万二千呎まだ日本の灯も見えず 瑞川
帰朝してその洋モクのキザなこと 生々庵
顔ぶれをみて帰朝談向きをかせ 小石
帰朝談ホームシックは伏せて置き 一伸

大阪通信病院川柳会 (大阪市)

橋本 幸男 報

すねかじり出来なくなつて夢がさめ けい女
すねかじり大学だけは出たけれど ハナ子
共白髪約した爺さん浮気をし よしを
古いなあと言われ受身の老夫婦 竹青
別々の趣味で家にいぬ老夫婦 春巢
しらふでは子猫みたいな酒豪なり 風仙洞
無重力状態でしたと二日 醉草
事故あつてからシゲナルがやつつき 没食子
事故係りあやまるだけに雇われる 春雄
ピヤホール一杯飲める娘を誘い 愛論
メロデーになつて一輪が咽喉を越し 夏生
ピヤホールお茶の代りとなされる 宏子
ピヤホール二号の方は大ジョッキ 竹莊
尻馬に押されて将棋優勝す 幸男
脛かじりセミプロほどになりはなり 路郎

南海電鉄川柳会 (大阪市)

辻 圭水 報

塵売所迷子の掛りも忙しく 和郎
出迎えて十年ぶりの手を握り 宏子
出迎えるの夫がどれか戸迷といし 句念坊
出迎えるの数をも記者は見逃さず 圭水
出迎えた窓から抱持たされる 貴山
出迎へ父の握手も馴れたもの 路郎

333 川柳会 (堺市)

杉前 南宗 報

世間から笑われてもよい金儲け つとむ
暑がり求める憩いのパチンコ屋 おっぱい
敷にかまれ鼻一段と高くなり 崑
喰うために敷はいのちをまた落し 一桑
涼み台敷も若い娘へたかつて来 狂二
市に編入しようパス停出来ただけ 生薑
停留所ここで別れる声になり 南宗
袖を引く子供を叱り立話 新石
共稼ぎ妻の昇給上廻り 八郎
昇給はしたのに赤字埋めきれず 楓
昇給をしたので月賦の額も増え 雄声

富柳会句会 (富田林市)

阿部 柳太 報

冗談が過ぎたか酒を呑み残し ひろむ
嬉しさが冗談過ぎて気をそね とも子
冗談を云い云い男にじり寄り 尚史
冗談も今日は笑わぬ子の熱 摩天明
風呂だけが欲しいと母のねがいなり 呑天
さあさあと追われて入るのもい風呂 美代
ナイターがすんだら入るババの風呂 きはち
帰郷して夕焼に染まる野天風呂 六童子
のどかしているとは知らぬ家族風呂 静林庵
トルコ風呂齢六十を意識せず 八郎
炎天にウンザリさせる立話 呑天
立話籠のキャンデーが解けかかり 柳太

明和川柳研究会 (西宮市)

樋口 舟遊 報

誕生日毎の写真を嫁ぐ子に 新子
誕生の蜻蛉にひい空があり 舟遊
独房の中で誕生二度迎え 蝶花

天へ誇りたし私は母となりました 夢虹
桃割って何のことなし誕生日 薫風子
さわやかな朝を父と子の散歩すむ 弦月
掛け声をかけてもつて来ぬ閑志 曙蝶
アンカーのフリート最後の丘を駆け 三舟
夢うつつ向いの人に返事する 大丘子
庭先に立てたのほりが大き過ぎ 梅志
建増しをする気の庭を広くとり 利男
下っぱとしての悲劇よ腹が出来 泰
主義主張合うてみんなが腹を割り 敬太
腹の立つ奴ちやが主義で斗おう 三司
夢もまた愉し二人へ草崩る

コクヨ川柳会 (大阪市)

川口 理休 報

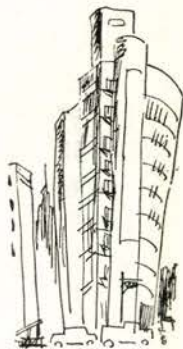
終点はやはりいつものバーになり 柳波
終点は日ぐらし鳴いて今日もすみ はたる
終点に悪いものありパチンコ屋 龜心
葬式に機転をきかす奴が居り 留鈍
機転きく我が子も母には鈍に見え 義広
流行に超然として才女顔 理休
おくれまい香も帽子かぶつて

酌よし 千日前大劇裏
TEL 〇二七二〇
味よし グベノ橋近映地下
TEL 〇一四七

梅里の店

大萬

★大万川柳(第百二十八回)を募る
兼題「おばアちゃん」路郎先生選
締切・十月十五日 五句以内
発表・十月廿日 (店内掲示)
投句先 阿倍野区松崎町三ノ二
大万川柳会宛



柳 樽 室

路 郎 生

★九月十六日の第二室戸台風では近畿地方はベチャンコだった。府や市が全力を傾倒して防備してくれたが、それは要するに防備であって、台風の攻勢の前には哀れな爪跡を残したに過ぎなかった。地球の外にまで出られる科学の力も、毎年のように襲う台風に対して予報だけでは無力にも等しい。せめて、風速を半減か三分の一減にする科学の力が欲しい。台風に對し日本としては防ぐよりは攻めるべきだと思う。一日も早くその方面の研究を世の科学者たちにお願したい。

★台風一過で、私たちはあとかたづけに奔命した。拙宅もご他分に洩れず、屋根瓦は飛び散り、塀はスッ飛び、庭は荒され、他所並みの惨状を呈した。見晴らしがよくなったと笑ってもいられず、早速仮修理にかかったが、それも人だのみである。

建築会社に通務している林宏子
女史の三男坊がノコとカナヅチの

主任技師で、電話機関係の会社に
いる、私の三男坊が照明係で、庭
先を昼のような明るさにする。

金銭登録の会社に勤務してい
る林女史の二男坊と、生駒から馳
けつけて来たバイオリニストの私
の二男坊が助手になって仮修理の
工事を夜の十二時過ぎまでやって
くれた。

私は二男坊をつかまえて、こん
な時には音楽や文学はサッパリ無
力やなあと笑ったものだ。一時的
にしろ塀がないと用心が悪いので
四、五人がかりで塀をおこした。
秋のふぜいをそえていた庭先の萩
も芙蓉も、うちひしがれてあわれ
な姿と化してしまった。しかし、
ここらには大阪でも高台の方に属す
るので、水の難だけはまぬがれた
ので、どうか住むのには事欠か
なかったのはせめてもの幸わせで
あった。各方面からお見舞をうけ
たが、まだそれにお答えするまで
に運んでいないので、ここで大体
のご報告をさせていただくと同時
に、心から感謝の意を表する。

★大阪方面の柳友諸君や不朽洞会
員らの被害状況などの問合せもあ
ったが、その人たちの勤務先や自
宅が大なり小なり被害をうけてい
られるらしいので、まだお互いの
連絡がとれず、被害状況の詳報に
ついては次号で一括してご報告す
ることにしたい。今のところ柳人

の人命に関しての心配はないと思
うので、その点のご放念ありた
い。

★編集のまっさい中に、台風騒ぎ
となったので、編集局はてんやわ
んやであったが全力を傾注し、大
して支障のない程度にまで漕ぎつ
けたので、この点もご放念ありた
い。

★八月廿六日には大阪に尤も関係
の深かった米人、グレンジョウ氏
（日本名、尚紅連）が心臓病のた
め米国コロラド州ボールダーで亡
くなられた。七十四才。氏は外人
中でもっとも川柳に理解を持たれ
た人で、その作に「ババママのそ
の子の親のアッパッパ」があり、
私たちをアッと云わせた人。

九月にはのんきな父さんで知ら
れていた漫画家の麻生豊氏が永眠
された。私と同性なので、氏がア
メリカへ出かける時、たまたま上
京していたので、岡本一平氏から
送別会へ出てはとすめられた
が、帰阪を急いでいて会わなかつ
たが、一平氏逝き、豊氏逝きと
うとう永久に会う機を失ってしまった。
柳人では石田沐天、野中陰一
の両君が永眠したことを知った。

淋びしい限りである。
★十月には関西短詩文学連盟主催
（大阪市教育委員会後援）の作品
展があり会期中に、本社の月例句
会があり、月半ばには大阪市・大

阪市教委・関西短詩連盟主催の大
阪市民川柳大会があるので多忙で
ある。柳人諸氏の挙ってご支援を
祈っている。

▼ペンの散歩▲

▼第二室戸台風被災地のみなさま
へ謹んでお見舞い申し上げます。

▼新聞週間にちなんで東野大八
氏、工藤甲吉氏の新聞柳人にご執
筆をねがった。

▼全誌旅のよみものでいっばいに
した。ページをくれば欧米も机上
にあるというもの。

▼目次を9ボにしたほど満載し
た。秋の夜長を楽しんでいただき
ます。

▼前号は好評でうれしかった。特
に「西沢の怒り」は他誌からもお
ほめをいただいた。いい原稿があ
つまるとありがたい。

▼好読みものをドシドシお寄せく
ださい。ただし私信めいたもの
や、ただ毒舌だけでおわるような
ものはいただけかねます。

▼文化の秋と人災の秋がいつもい
つしよにやってくるのが日本の秋
ではなさけない。ほくのように夜
中に仕事をする者へ二日間の停電
はこたえた。印刷所も悩みはおな
じで校正の出がモタつているのが
気になる。

▼あと二冊でまた年が改まる。ま
ったくアッというまだ。（一三夫）

新発売



大日本製薬

頭を使う人の 胃の薬

プロバンM錠

10T・30T・100T

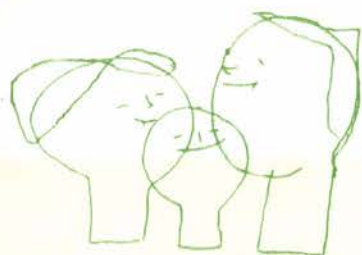
★健保適用

神経を鎮めて原因から治す

胃酸過多から消化性潰瘍にいたるまで多くの胃腸
病は、精神的な負担の連続が大きな根本原因をな
していることが認められています。

プロバンM錠は胃腸病の原因、とくにその根本的
な原因をつく 新しい治療・予防剤で、各成分の綜
合効果が迅速・的確にあらわれ、しかも持続的で
す。また副作用が少なく、つづけて服用出来ます。

一家そろってホーライ党



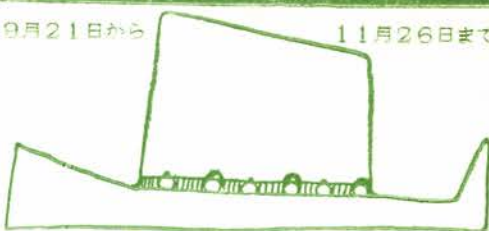
廣東料理



大阪なんば・TEL 04551-2

9月21日から

11月26日まで



アメリカ開拓史 あやめ池大菊人形

西部劇大会

チャンスが2回 スバル360乗用車・三菱電気製
品が当たる ダブル抽せんつき割引前売券130円

菊の香につつまれて
いっも楽しいあやめ池

西部開拓史ホール・大菊人形館
松竹歌劇・秋のおどり、15景
水上ジェットコースター・西部の
町・西部の汽車・休日・野外劇場
でアトラクション開演・動物園
動物サーカス・空中ロープウェイ

大阪上本町から23分・奈良から
7分(休日奈良ゆき特急も停車)
あやめ池駅のすぐ前が会場



近鉄 あやめ池遊園地

● 煙 ら ず
おいしく焼ける
——天火式——



ホームロースター
HR-10型 100V-600W 正価 2,950円

三洋電機株式会社

SANYO

サンヨー ホームロースター

倉敷紡績株式会社



東レテロン65% 高級綿35%

クラブウ

テロン シャツ

姉妹品 クラブウテロンブラウス